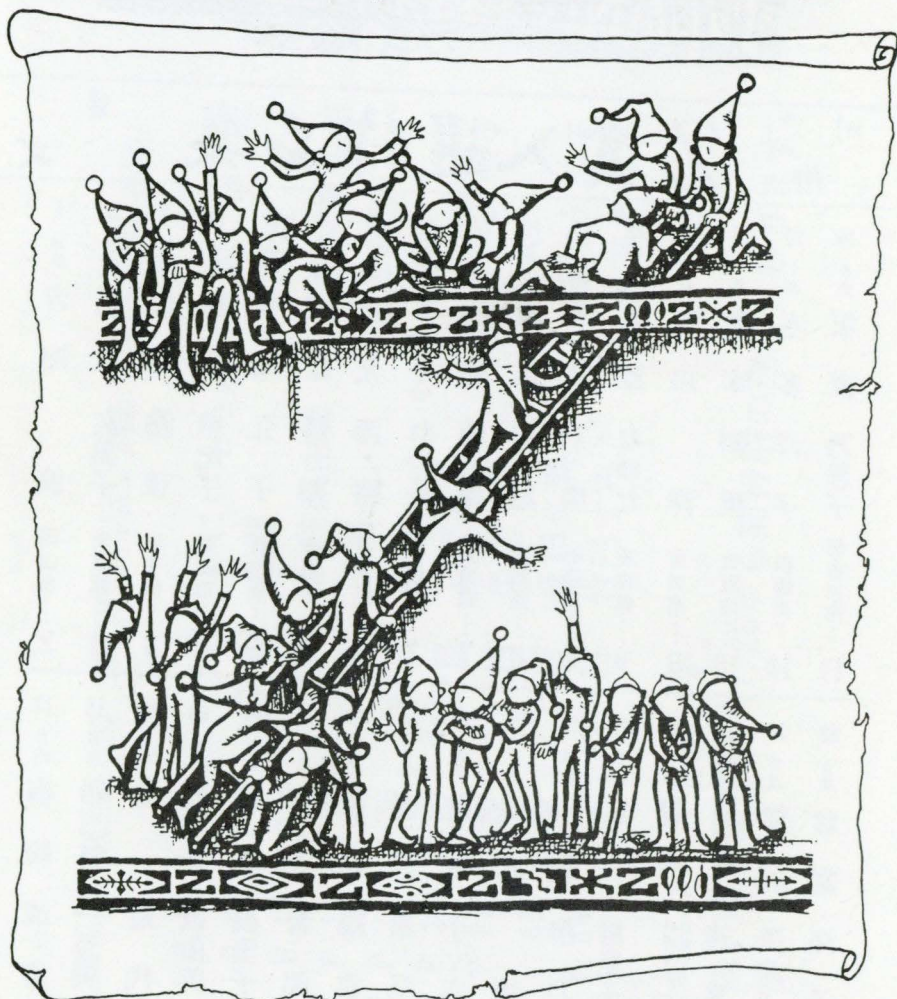


第 1 2 回

川柳乙賞入選作品集



乙賞選考委員会

48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33
1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点
みとせ	千葉	矢本	福井	谷沢	戎	平	矢島	西秋	菊地	松永	伊藤	徳永	高橋	広瀬	立原
りつ子	風樹	大雪	文明	けい子	修	宗星	玖美子	忠兵衛	俊太郎	千秋	紀子	政二	かづき	ちえみ	みさと
高松市...	黒石市...	弘前市...	青森県...	新潟市...	青森県...	東京都...	東京都...	千葉市...	東京都...	福岡県...	北海道...	守山市...	西宮市...	仙台市...	土佐市...
27	26	26	25	25	24	24	23	23	22	22	21	21	20	20	19

守備	ある	選	選	「生き方」	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49
範	選	後	後	「志」を大切に...	1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点
囲	後	に...	に...	「志」を大切に...	柿木英一	大橋政良	竹内すみこ	河瀬芳子	奥山晴生	桐越千絵	宮本めぐみ	長井すみ子	斎藤はる香	木本朱夏	吉田三千子
...	感...	...	...	...	大東市...	砂川市...	松江市...	高槻市...	京都市...	北海道...	仙台市...	福岡県...	小樽市...	和歌山市...	名古屋市...
...	...	...	...	...	32	32	31	31	30	30	29	29	28	28	27

選 後 感 八坂 俊生... 38
オリジナリティのある作家を

責任ある作家 岡田 俊介... 39
選を終えて 酒谷 愛郷... 37

三十本の花たち 工藤 寿久... 41
高田寄生木... 42

雪の極からの風 荻原美代子... 43
ひとすじの光の中で... 吉田 浪... 43

選 考 結 果 岩崎眞里子... 44
表紙絵 岩崎眞里子

急 告

事務局の都合により、第13回作品募集を休ませて戴きます。



川 柳 Z賞入選作品集 目次

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
6点	7点	7点	7点	7点	8点	9点	9点	9点	11点	12点	12点	12点	12点	19点	19点
坂本東乃	本多洋子	倉本朝世	普川洋	大原なゆた	情野千里	渡辺和尾	柴崎昭雄	なかはられいこ	秋元深雪	前原勝郎	板東弘子	樋口由紀子	佐藤岳俊	荻原久美子	吉田浪
加古川市...	松原市...	大阪市...	市川市...	茨城県...	姫路市...	愛知県...	青森県...	名古屋市...	弘前市...	津山市...	香川県...	姫路市...	岩手県...	東京都...	岡山市...
11	10	10	9	9	8	8	7	7	6	6	5	5	4	3	2
32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
2点	2点	3点	3点	3点	3点	3点	3点	3点	3点	4点	4点	4点	5点	5点	6点
倉富洋子	驚谷美津子	万迷多	樋口仁	峯裕見子	海堀酔月	山本礫	島田小吉	横村華乱	福井陽雪	大谷晋一郎	岩崎眞里子	坂井眞由美	島道代	小林一夫	梅崎流青
東京都...	秋田市...	宮古市...	四日市市...	大津市...	堺市...	京都市...	東京都...	柏崎市...	青森市...	高松市...	黒石市...	滋賀県...	青森市...	豊中市...	柳川市...
19	18	18	17	17	16	16	15	15	14	14	13	13	12	12	11



第十二回大賞

葦辺ゆく蝶のおぼろを抱かむと
むらさめのようなことばをそぞろみち
残照のひたぐれないに花は濡れむか
問えばしずかに群青の息零せり
ひそとわが冬かげろうに溶けゆかな
霜夜枕辺 椿つらつらめぐらして
錆びてなお烟る黒髪 黒椿
髪乾くまでの一念萩焚かむ
献身をほどこいていたり霧 夕べ
秋あした烟る野菊を抱きにゆく

形代のゆるゆる胸乳より沈む
擾々の水に馴れむと萍は
生りて啾々泳ぎなかなの水の暗
かなかなの淋漓と啼いて濃ゆき面
飛語乱々しぐれて黙す白木槿
火より生る硝子の馬のひややかな
憧憬の一樹一木茫となる
ごうごうと葦原焼かれ やがて形代
火の奥へ奥へと幽き髪梳けり
残響の渡り廊下を還らむと

あきくさのうしろすがしき立ち仏
萩叢のあわいへ目鼻流しけり
夕日のなかに投げ込んだ遠い昨日
花びらの脱色すすむ雨後真昼
野や暮色ゆるびしおん手見限る手
秋夕べ記憶の蝶の烈しき訣れ
葦の辺の苦きとしつき束ねおり
蓬髪に指櫛からむ れくいえむ
晩秋の向うほのけき眉 くちびる
くちびるに触れしものみな芒原

岡山市 吉田 浪

第十二回大賞

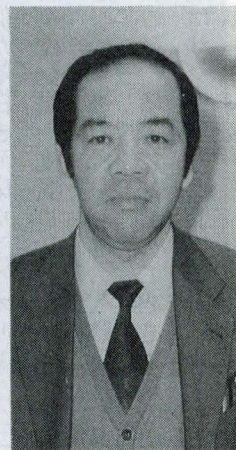


灯のきみし匂ひガラスを思ふとき
さよならはいつも武士道夏つばめ
瞋りてもなほ月浴びて花浴びて
骨肉と言ふうたかたを兄妹
相似たる白き河床ヴアイオリン
闇一枚夕風一枚混じりあふ
思ひつつあれば哀しきのどぼとけ
舞ひ落つる蝶に妬心のごときもの
かはせみの野火に焼かれし野をうつし
一騎見ゆ冬桜の下を通るたび

風景のいまだに夏の闇垂らす
骨壺といふ杳かな水の器かな
飲食ののち翳りだす空壕よ
胸中の積木いつしか方舟に
悲しみの氷河がボトルネックまで
ゆめあまた垂れて西日の昏れやすく
翻るものみな塩の味燕子花
われ青く秋明菊を手折りきて
空蟬の真夜に酔つばき聲を出す
わが鎖骨純白の音洩らさずに

東京都 荻原 久美子

くちすこし開けて後の世の螢
巻ひげの先の届かぬところまで
夕闇に青桐として耐へてをり
ニュートンのいたみを抱き河馬眠る
光陰に紛れ込みたる枇杷の種
さみしくて冬満思ふ月見草
ことされて残夢一両かひもどす
身の中に天地無用の虹の橋
まくなぎのリラに三世の契りかな
二月の父は雨滴のごとく老ひ



第二回風災賞

岩手県 佐藤 岳 俊

凶作の藁をたたけば父母の骨
ひもじいか胃壁のすみのにぎりめし
ねこやなぎわたしも光る冬の月
稲焼いて焼いてふるさと灰にする
凶作の歴史に泥がたまっていく
情ひとつ敗者へ燃えるゆきおんな
いちめんに天保の飢饉視野を埋め
藁灰に刺さる老父の影ひとつ
餓死供養とつぷりと着る雪蒲団
凶作の泥にかくれて生きていく

稲株も焼いて胸まで灰に座す
大寒の夜も産まれて泣きじゃくり
三反の田から三俵しほり取り
米輸入瑞穂の国が枯れていく
凶作の稲束を負う木枯しや
井戸水に逆さの鬼を吊っている
茶わんめし寒らぬ稲の向こうから
ちぎれ飛ぶ初いちめんに農の首
雪渡り湯気の堆肥を積んでいく
脳天につづく一揆の旗ばかり

農夫の死冬の星座が抱きしめる
雪が降る夢の中まで積りだす
何もないわたしを燃やす冬木立
凶作の縄を吊して初日の出
鱈汁をすすり地吹雪きいている
米櫃の闇に凶作米こぼれ
ひょっとこもおかめも雪を着て歩く
七人の敵へ刃向かう朝の靴
米輸入休耕田に唾をかけ
豊作や根雪に植える藁の苗

香川県

板東 弘子

神様を呼ぶ勾玉を作らねば
わが海を何時まで荒らす魂まつり
ちちははを担ぎに来たか火の祭り
草笛の一施清き涙かな
月光に心から濡れる蛇の衣
はは埋むまで花吹雪止むな止むな
紀り笛ちちはは薄きガラスの塔は
下駄の緒のゆるさで送り火に屈む
熱き語やあやしき髪が多ければ
大夕焼けの中で独りの綾を織る

残菊も私も時雨に立ち向かう
受話器の向こうは笑いこぼれる今日は満月
風によろけて疑似餌を含む女も魚も
時は褐色 木連いちまいずつ落ちる
再婚へ何を繰らすのか鐘は
風一条 私の骨を賑わわす
時計が止まる我が喉の朱ければ
母系かな灯かりが寒い水の櫛
旅の衣の端にひろがる蜃気楼
一本の樹を揺すっては夢の母

土鈴振る母の香りが消せそうで
母の向こうへ花の浄土の絵を掛ける
絮を吹くうつろい往くは人の影
もはや土鈴も過去は明るくは言わぬ
我が影の飢えて傾く水の空
瘦身のゆらゆら言霊のなかに
百燭きしめき 父の影奪いあい
白い息はく犬も私も神になれず
石積みにときどき降りる冬の河原
罪ばかり数えて神の生臭し

姫路市

樋口 由紀子

ボート屋は店仕舞する月の下
河口まで男雛女雛の貌なりし
蝸や指のすきまは盗まれる
跳び箱を飛び越えてくる夏の闇
押し入れに馬を連ねて消えていく
対岸のおとうとたちは伏せる兵
ちちははの沈む真昼の駐車場
葉桜になるとき棺を見つけたら
しあわせはグリコのおまけ転がして
剥製のけものを飾る現状維持

夕焼け小焼け母の鏡はくらくらする
まぼろしの下り列車に夜具を敷く
二人組うすべにいろの息を吐き
せつぶんす蝶の触角身に近し
額のあせきさらきさらきと悪である
そして再会折りたたみ傘手に持って
鏡の中の顔は豆科の植物か
和筆筥の把手に長い汽笛あり
もっと急いで十種競技を完了する
風船の紐長くなる父母の家

くるぶしに無明の毬を遊ばせて
本が積まれている片恋の廊下
湖のボート繋かれ盃蘭盆会
右足で家の深さを確かめる
横顔が打ちあけられる昼下がり
姫路に抱かれた猿は無罪放免
ビル解体師のうしろで鳥になる
折り鶴のどこかに閉じるわたしの音
求愛や筆にたっぷり墨をつけ
ラグビーのボールを奪う遁げるため

春月濡れて魂鈍らせ過ぎゆけり
 枇杷の実をてのひらに乗せ熱りぬ
 今生のいまが重たし雨螢
 白桃の闇ほのかなる放蕩や
 空蟬や思いつくせり死後のこと
 初秋揺れたし揺れて私の白い骨
 刻の雫こぼして美しき秋思かな
 秋を聴く風の生れた場所に来て
 美しくわたしを濡らす秋の雨
 忘我たりいっせいに咲く曼珠沙華

津山市

凍て蝶の動かぬ位置が我が位置で
 寒月のうしろすがたのやさしさよ
 寒鴉のほかは無音の盆地の灯
 孤がつまる肋にひびく冬の雷
 身のうちにひたすら雪の降り浄土
 寒紅梅月の孤高はよかりけり
 生きているぞとぼつりぼつり冬桜
 日も夢も生も流れし如月野
 いつか芽吹く冬を心に抱いて冬
 皆既月蝕枯野さまよう夢を見し

前原勝郎

風の形して真昼の闇が火となりぬ
 昼月のうすさほどなり懺悔なり
 写しあう遊び私がわたしであることを
 瘦身の背骨を落日還りけり
 酔うて候骨たいくつに遊ぶなり
 ふるさとの水呑む咽喉の美しや
 死ぬ日思えば空が丸ごと落ちにけり
 月割れて死は恍惚と近づきぬ
 死の序列おもう春寒の月の光
 もっと深いところで愛せたら死のう

弘前市

深呼吸 花火をひとつ身籠りぬ
 堤防を崩して話す過去のこと
 身の灰をあまた哭かせて冬怒濤
 求愛の波ですやがて砂を噛む
 産めぬ子とうたかたを視る花林檎
 蕎麦の実をあげる不実なる鸚鵡へ
 冷凍のみかんを夫婦して齧る
 かかわりのある人とする芋洗い
 放電の止まらぬ芋と煮くずれて
 波音を殺して葱を切っている

箱人形 妊もることの恐ろしさ
 犬ふぐり犯してみたい線があり
 版画刷る答え合わせに飽きてくる
 月の橋 月のかたちをあてにせず
 墨に触れ裂くか別れの螢鳥賊
 帯締めて黙しておれば冬の蝶
 割れ皿を集める ひとつ余る過去
 何を見た背骨だ防波堤の罅
 果てしない飢え空箱の中に空箱
 逃亡はかなわず硝子壺を振る

秋元深雪

花遍路 宅の主人はおりませぬ
 次の世へ曳きずりそうな芋の皮
 無明へと零しつづけているインク
 不意に鳴る目覚し時計 喪の席に
 死の刻より送られてきた砂時計
 断ち切れぬカルマ 缶蹴り鬼の缶
 影踏みをしなから冬の海に着く
 氷点を凝視める かかみ屋に鏡
 日蝕はじまる働く掌のように
 日輪へ何枚脱げる呻き声

名古屋

冬の向日葵 眠れないのは君と僕
 共犯の拇印がふたつ美しい
 誓紙焼く 冬の指紋は消さるべし
 花抱けば両のかいなの異質なる
 愛日や ひとすじの川くろぐろと
 桃花散るちる行方不明の子が笑めば
 電球に透かせばとても親しい死
 沙羅の花 とどまることは卑しいか
 恋なれば正しき蝶の掴み方
 汚れゆく私とバケツの日向水

実存や 胸に赤道 沼に花
 あかつきの直情 ほくろ開くべし
 伝説のとおりに曲がる夏の幹
 かの町へ夢の線路は白より白い
 苔のように悲しむことよ秋の雨
 凜々と涙する樹を正視せよ
 憧れは垂直に降る秋月光
 夢の涯 向かい合わせの椅子二脚
 黎明の樹となる血肉灯しては
 歌曲聴く油断のうちの新月よ

なかはられいこ

暗闇で百合が開くは喪の規律
 私と蟹も解体されるもの
 暗渠かな肉の一片口にする
 短日や花の咲く樹は燃えやすし
 私なら青一色で描く駱駝
 夢にみる鉄の車輪の驀進を
 もの言わぬ枕に魚の降る夜なり
 しらしらと瞳の中の無人島
 明け方のくるぶしふたつ鈴が鳴る
 錆びてゆく かくれ遊びの羅紗ばさみ

青森県

次から次へ形見となりし春のゆび
 桃の実を頬張る 崩れゆく埴輪
 葛藤の実を啜えたる指人形
 曇天の節穴となる喉ぼとけ
 朝粥の木馬はことりとも言わず
 月光の坂を下りて泣き虫め
 水音のはげしくなりし仮の葬
 おろおろと父の茶碗を抱いている
 曇天を歩く 膝から下の泥
 からりと晴れて色のない死を跨ぐ

たそがれの臓器啜えて母に問う
 結び目がほけて母がこぼれた
 月下にて母は土偶を生み落す
 喉光る夜あり滅びたる螢
 眼底に霧立ちこめて母の魚
 体内を奔る夕暮れ かすかな痛み
 したたかに転ぶ冷たいスプーン皿
 わが褥けものの形して暮るる
 夕立や十指をこぼす茄子の馬
 月光を啜えて愚かなる埴輪

柴崎昭雄

無明長夜びっくり箱に眠りたし
 月光の真下の死者よ 萩の花
 一族の森をはぐれし哭きぼとけ
 錠剤をむさぼる朝の木馬かな
 夕焼けやコトリと乾く魚の目
 しりとり舌の舌たそがれの断片に
 長月の魚になりたる哭きぼとけ
 踵からゆっくり果てる 冬の廊下
 口閉じたまま果ててゆく雪だるま
 月光を脱いで透明なる死体

愛知県

さくらばなおほろなひととおほろなことば
やわらかいのちあおむしうらがえす
てふてふのまどをかすめてとびさりし
船出スル岸ニイチオクノオブツ
心中の粗き土持つ誇りとす
土に転んで傷みと空の青さかな
風を見ていると豊かになる午後だ
今日を占う雨の滴を手を受けて
せみふらちせみはとおかをなきわめく
なめくじらおひさまとまだなかつたがい

かくれんぼなつのはななくそのうしろ
とつぜんにひとにあいたくなるあつき
ケフモセミナカズアシウライタム
八月六日 雨降り背ノ丈ノ刃物
塩水ニ晒セバ阿呆ニナルトマト
蔓握ると弓のごとくに夏の日は
曳航船ある烈日のやさしい絵
雲も飛沫も白くて百合に向いている
岸辺ゆく船漕ぐ嵐の海もまた
こんにはさはさようならとてもかなしいね

渡辺和尾
芒とびたてあたりいちめんことばにして
灯に顔上げていずこへ進まんか
霧深し夢を見るのはこのときに
銀杏は落ちて寓話の最終回
生きものというしあわせの位置にて眠り
雨降って男に淋しいときがくる
欲望というやわらかき水の音
水の流れに添うて朝昼晩とあさ
体熱というものがあき初秋かな
傷つくことが上手なほくの影

姫路市

おとうとに土をかぶせてみる遊び
冷蔵庫が揺れて始まる蛇の婚
こめかみから暮れるピストル持たざれば
穴を掘る猫をしつけるより先に
まぐわうや順手逆手と毬ついで
眠りの底の寸胴鍋を覗きこむ
白鳥座を指差す兄の毛むくじや
流木に触れ抱卵の魚となる
密会や野は花の声 蛇の声
月が出て非の打ちどころなき情婦

孕み蝶もう乳臭い腋の下
喧嘩なら負けぬうしろに咲いている木槿
蜥蜴と遊ぶわたしを兄が抱きあげる
葡萄つぶしてから聖なる左の掌
芙蓉かな男の眉を隠すのは
野菜工場しずかに接吻が育つ
秋雷や兄の乳歯は脱けおちる
ウラル・アルタイ語族よ死んだ弟も
尻もちをつく竜眼は多淫の樹
沈没船の白骨よりも無垢である

情野千里
好色な順に並んで撮る写真
遊びして戴星の馬刺りあげる
狐おろしの水を飲み干す主婦となる
草競馬まよわず脱いだ方が勝つ
わたしまで途方に暮れる足袋の穴
逢わんかな北では林檎受粉する
おとうとは国籍不明 雨ぼつり
計り売りのお菓子が回る情事かな
蛇の卵はななめにころぶ夏の坂
追いかける恋の愉しさキムチ鍋

茨城県

滝の水ごうごう落ちて逢いたくなる
生まれつき傲慢 高い場所が好き
事なかれ主義よ回游魚はまわる
髭を剃るあなたも偽善者の一味
遠い瞳をする男というだけで
仕返しは完璧 満月を見ている
彗星を見つければ名を与えよう
滝を見るわたしを凝視する誰か
梅の木に梅の花咲く つまらなし
一族は女系 受け継ぐ離婚癖

母恋えば闇深々と舌の奥
山百合の香を満身に嘘を言う
犬とでも時にいのちの話する
癒えがたき記憶に青白し雨は
黒を着てわれに感傷許さざり
文机やここ数年の老い加減
わが位置は狂わずにあり天の川
切り花の枯れきるまでを見届ける
山脈やどこかにふるさとはないか
キーウイの枝葉猛るや逆恨み

市川市

引潮の快楽か老いのうす明かり
白葱の白さを老後とも思ふ
こめかみの辺りを抜けしひとつの計
死者生者行き交う昼の交差点
ガラス器に音楽満ちて昼の葬
喪の裾に音楽低く流れつく
父の形見の舟音を聴く梨畑
冬の夜の足音赤くまた白く
泳ぎくる死者を真下に聖母像
木洩れ陽の斑を胎内と思ひけり

梯子から死者降りてくる月明り
冬空の無言を白い刃と思ふ
梨むいてより影と話しており
花野抜けきたらしがにまたの男
水の暗がり菊の匂いを友として
坂ゆるやかに月明の百合の匂う
舌を刺す空降りてくる十二月
霧に押されて尖塔を昇る青
読経する不確かに声寄せ合って
ぬらぬらと在る解剖図秋深む

大原 なゆた

さくら咲く地球は冥い冥い惑星
青嵐の中一点を見つめおり
望郷や息つきをせず笛を吹く
ポリ袋 実在なんて始めからない
大輪の白菊よ死は絶対者
爪紅く染めて嘘とは無関係
生まれかわるなら人命救助犬
晩秋の天 鳥葬を許されよ
老いたのは気のせい同じ樹に夕日
いずこより来たわたくしか冬銀河

普川 洋

Kという男のことも昆虫図鑑
薄目して冬のさくらのこと思う
コスモスのモノクロに咲く姉の肖像
夜の足音 耳の片側淡く浮く
透明な棺が沈む秋の海
ももいろの骸がすかに口あけて
白菊の死を待つごとく咲き競う
鏡の中に還らぬ人が一人棲む
花が散り寺のしじまは何もなし
思ひ出を空深く埋め春の使者

「フアントムペイン」

大阪市

倉本朝世

暗がりて鳴る廃盤のレコードよ
両側にいて月は欠け始め
修正液は買い占められて凍河あり
テールクロスの襷を数えている迷い子
月見草泡立つ街を遠巻きに
割れものが続々届くゼロ番地
少女の首で千切れる母の首飾り
たったひとりを選ぶ 運動場は雨
陶酔や広場に水は死につづけ
舗装道路は伸びて背骨のない男

松原市

本多洋子

風は水色だった紙飛行機の回想
桜前線北上 誰かを消しながら
いのち散るたびにいのちの樹を揺する
女人埴輪の耳のうしろの静かな海
心碎けば虹彩 砂時計は砂
硝子ひび割れ寒の椿は寒に咲く
湖底深くに沈める体温の灰
喪の彩つなくモツアルトのパッチワーク
花冷えのやかんほろと妄想
少女すらりと体臭 鮎科鮎属

深みに嵌ったらしい私の尻尾
上澄みでよろしければ愛をどうぞ
鉛筆を砥めるビエロの更年期
欲しいのは眠り 女は殻を破った
敵は机の花を絶やしたことがない
喝采が欲しくて赤い鼻にする
安眠できるのは出口のない穴
三月に熟れる少女の片えくぼ
珈琲館の二人ルオーに見られている
黒鍵を転がるアルカンの帽子

モアイ盲いて蒼海に耳そばだてる
冬薔薇 哀しきはみな剥ぎ落す
ジンベエ鮫もめだかもきつと重いのち
円空佛なら解る生と死のなぞなぞ
仁王解体ごろりと空を掴む腕
勾玉に透ける卑弥呼の脆い部分
雪は胸ほど羅漢いつまで合掌癖
目がしらに体温春の釈迦三尊
剥落の腕 菩薩の青を激しくする
遠い日の砂丘に埋める夕陽のかけら

加古川市

坂東 乃理子

ひよこ逃げまわる子供も逃げまわる
寄生虫ぐるみ仔犬を抱き上げる
伝書鳩 神社の鳩を馬鹿にする
伸びきった芝生をいっそ三つ編みに
ペンギンの転ぶところを見てしまう
哀れさが漂ってくる雨の犬
犬昼寝 いつか死んでもこの形
すくいなくなる街角の古い師
おばけやしきに本物もいることがある
息苦し聞かれもしない事をいう

どちらも我慢している二人組
焼肉終る花火のもえかすのように
虫とりあみからだ虫かごへ移される
放つといてほしい九月の空の下
首だけのトンボ私を噛みにくる
それだけの恋 発酵す腐敗する
脂ぎってくる私と手の銅貨
墓石は荷物置場じゃありません
こんなにもよく眠れます 北枕
歯茎がキラリなんて言われてかわいそう

わたし以外の人がもっているお菓子
知らぬ間に忘れ去られている桜
ほお杖や顔は平行四辺形
昼寝からぐらりと死者へ移行する
美しいわざわいのもとびわの種
涙と鼻水 待遇の差を思う
寝ている人が暴力をふるいます
焼き芋の落ち葉の中のみ虫よ
無言電話は死者からと思うこと
梅ひらく謙虚と卑下は違います

柳川市

梅崎 流青

春始まる少女の髪に触れてもみよ
夜焚火や過去一切はよく燃える
結水の街のどこかで肉を煮る
胎内の森に帰ってゆく父等
独楽倒れわが生涯を日にさらす
風船の紐放つべし地上の春
石割れて大人の童話転がりぬ
花野昏し銃で贖うものひとつ
ずぶ濡れの馬どれほどの科ありや
死に場所はキャベツの奥と決めている

指の血を青菜で拭いて決別す
煙突が倒れる真っ赤な舌出して
オオカミに食われる話して眠る
敗北からし蓮根鼻を抜け
蟬の身と重ねて白き粥する
宴始めよ火葬場の待ち時間
柩の出た部屋たちまちにがらんどろ
ひまわりの黄の中心を漂う無
寒ければ皿を一枚ずつ割ろう
生きのびた金魚数える無月の夜

蟻の曳く音はまさしく他界から
死刑まだ続き廊下は磨かれる
縞あざやかこの世も蛇として生まれ
死に近き日か脳天に花火浮く
青き蜘蛛皮下出血の家に棲む
子と漕いだブランコいまも野にあるか
解剖図の胸の部分にある野分
泣けば済むものを虚空のからす瓜
労働者のタオルは棒のごと乾く
藁の火に肋を温め他郷なり

豊中市

小林一夫

光さしけり小さきものの足跡に
浮遊する夢よ螢は点滅す
君はうつむきオート・フォーカス焦点ずれる
春愁や碧き目の猫眼を閉じて
蟬幾百ほくはゆつくり貧血す
めまいするのはたぶんあなたのせいだろう
話そうか月に模様のあるわけを
その朝君はバケツで水を撒いていた
石を沈めんあなたの深い海底に
こっそりと明日ふたりに消えようか

泣きたくて泣きたくて怒っている
嘔きたるものがかなしく流る
人影なくて淋しい村だ
家猫もしぐるるままに十二月
彼岸花が笑う笑う夜の森
脚に蟻這いあがり夏終る
あふれる水ありあふれ給へと思う朝
死を照らす螢光灯の下に座し
老人不意にでてる坊主を作りたる
もう逢えぬ人の幾人月の道

煤煙の横に夕日の沈む町
空あかるくてつくづく淋し
月光に猫今生の影曳けり
極月の父の秘かなし父かなし
母の弾くピアノほろほろ皿の鯉
母を泣かせて父を殺して夢の町
少し猫背の母と二人で墓洗う
祝宴の酒ゆるゆると誰か死す
彫像に木洩れ日降りて幼児の忌
寒日や職人熱き腕もてり

青森市

島道代

ひまわりを描く時いつも雨になる
泣きぼくろ冬が私を出てゆかぬ
芽のでない種をときどき掘り返す
ころがせば鳥の形になる炎
空回りの自転車月がまた動く
夏大根おろして迷い深くなる
浮き沈みして届かない毬の位置
人形の瞳になって散るさくら
臆病な面を一枚また被る
曲がり胡瓜刻むどこまでも曇天

叩き雨汽車はしょんぼり立ち止まる
振り向くと真冬を指している時計
壮絶な戦い靴が売り切れる
疑心暗鬼の小石一つが掌に余る
病名にこだわっている冷凍魚
寝返りや真冬の海を逃げ切れず
長電話死ぬ話まで来て終わる
影もひとり私と同じ咳をする
セロリ噛む冬の匂いのする部屋で
太字では書けない母の水溜り

母の荷も母も背負えぬ風媒花
何も生まれぬ掌がある夕茜
螢火よどのあたりまで続く闇
散り際をふと考えているピアノ
生きる術じやがいもまるくまるく剥く
さんま焼く方程式の解けぬまま
風を待つ枯れ野を少し翔ぶために
飛び乗って行くあてのない秋のバス
しあわせの筈小さくなって雪
ひとり居の半端な歌が終わらない

滋賀県

板井眞由美

歯の奥の磨ききれない嘘が好き
目を開けて眠ったままの魚を買う
六〇ワットの光を余す部屋にいる
首輪した犬にしっかりと吠えられる
小さな蛙小さな声で鳴いている
泥つきのままをもらっていただこう
塵になる日は近いよね高い空
私を煮つめていくと苦くなる
電車が来るとまですることを考える
あなたまだウルトラマンと住んでいますか

やわらかいタオルで顔を拭いている
鬼は外後はいいい人つまらない
弁当の隙間を玉子焼きでうめる
真っ直な魚の骨が残ってる
耳垢除去ボストの中に光射す
自転車こけたまんまになっている
切り口が違って見える交叉点
缶切り不要私は青いみかんむく
コッソンと鼻から落ちて行くハガキ
真夜中の畑の声を御存知か

家に帰ると痛いところがよくわかる
コンビニへたりない今日を買いに行く
憎しみを込めておむすび握るんよ
湖へじんじん車走らせる
夢の数だけ柿をちぎってくれないか
スニーカー雨の匂いのしたような
くちびるが荒れてきたのでハモニカ吹く
約束をぐるぐる巻きにして放つ
ふたりに笑う小さな秋を見つけた
ハンカチを振って許して下さった

むらさき野

黒石市

岩崎眞里子

霜枯れの蝶とおぼしき母の羽根
雨に咲く痛みの花を三ツ編みに
横抱きにできぬ母なら瞳の中に
蜚咲く暮らしよ桃の皮薄き
弱虫を呑むと紫蘇色の沈黙
ひぐらしよないていたのはわたしです
葛藤を絵にして母のかざぐるま
天の縄地の縄ここに冬の縄
あといくつ越えれば蝶を生む泉
病ありこころこの手に取り戻す

丁寧子らを並べて冬の指
踏み石のころころ少年草の花
幼さが透き通る日の朝ぶどう
陽の記憶いのちの記憶時雨ゆく
麻酔から醒めて茄子紺の静けさ
傷うけて桃の折りの深さが香る
輝きはともも大きな傾きで
少年は明けむらさきのひとしづく
子を放ち星生む如し散る如し
むらさき野背負うて母はかたつむり

菜畑よあずかり知らぬことばかり
待ち人の心の臓めく冬の壺
指の先風の入口私の出口
まるさんかくしかくと流れゆくほたる
問い返す鏡よ、そうか、これがこころか
感動に咲く耳ほたる大合唱
癒やされる一〇〇%受動態
合掌の指先北にチューリップ
茄子・南瓜・林檎・神様・仏様
裏編みの未明を愛す今も晴天

〔庭師〕

高松市

大谷 晋一郎

空蟬の上に空蟬 夏の天
まなうらに幾百翔べり重ね蝶
剪り落とす花びらあつめわが血族
清水汲む両手に汽車が戻らない
葉鶏頭の頭上を過ぎる嫁の列
樹を降りる蟻の数ほど腕の疵
爪の泥やがてこの大地に眠りたや
垂直に夏の葉陰を吸う黒子
白い樹の誰を祀りし灯を囲む
葉刈りした日から蟬来ぬ暑い家

蟬の樹をぬるぬる降りる黒い貌
勤め人のように樹を降り樹にのぼる
樹の呼吸に吞まれる汗も樹の色に
村の樹をいっばん奪う夏の客
農薬散布いつかわが身と思うなり
空のない街でこんなに蝶の羽根
廃屋の今朝 朝顔が咲いたね
無花果がズドンと落ちる廃墟だな
花の名を聞かれアハハと笑うのみ
四・五本の芒で足りる昼樹海

木と話す時 遠ざける花鉢
葉を曳いてゆく蟻ん子の黒い貨車
晩秋へ掌の糞虫を高くあげ
一晚を木の奥こんなに鳥銀座
樹の裏の虹瘦せてゆく男面
樹のなかで光る己のわが墓標
石路の花 晩秋の野を嘶す
掌に盛ればこんなにかるい草の兵
昼餉ひとり 椿 山茶花 実南天
昏れはじまる水面に未来も庭師かな

〔追憶〕

青森市

福井 陽雪

一筋の光が傾斜して碎ける
工事中でした幸せ行きの道
葉包紙の褥に沈む密月よ
仕方が無い仕方が無いと春の雪
喝采の音が広がる水枕
枕カバーに雪の形の人模様
病室でラッパを吹いている戦士
一回まわるたびに木馬は涙拭く
冬の馬神になろうとして暮るる
流れない川に沈んでいる時計

この先の道は幻桃の傷
残照やまあるくまろく舞うとんぼ
重い荷を背負って光るのか螢
生き物が蠢く闇の奥の闇
魂を売る音がする飯茶碗
戻れない道に桜が咲き乱れ
まだ胸に野火が灯っている別れ
鍵盤にない音で散る桜桜
霊柩車靴が一足消える音
指先に父の死に顔重ねけり

喪が明けてどんどん増える水溜まり
母の歌時々水の洩れる音
わたくしを平手打ちする冬木立
絵合わせの一つが欠けて目を醒ます
ウラン発光きっぱりと剃る無精髭
暗闇にぽっかりと浮く青い空
妻の背に僕の子がいてカランコロン
遠い日の虎落笛聴くひまわりよ
森には森の僕には僕の息遣い
背番号に一種一級と書いて春

柏崎 市

横村 華乱

地の果てに食いつめている神が棲む
大鍋に五百羅漢を芋煮会
二ヶ月の鶏卵を呑む妻盛る
雪蛭片方ちさき乳房吸う
雪蛭別れ話を繰り返す
ぼろっぼろっぼろっと冬花火の泪
冬花火墓標が頬被りして見てる
拳骨の闇しんと父の雪
烏めが何喚こうと冬帽子
雪明り座位にて睦む道祖神

どんと焼飯面は捨ててなるものか
蟹茹でて海の蒼さを消してゆく
そろりそろりと棺桶を出す牡丹雪
という訳で鯨鯨吊し切り
人間の馬鹿が勝手に夫婦鱈
鱈になり雪泳ぎ来ぬ午前二時
貧相な裸である旅浴衣
一句呈上墨の濃さなど思っている
あれは嬉しいときの父の貌
鯛焼を食べる老後の戯れに

花の下こうしているとまあいい背
酔うて歌うて骨壺ひとつあればいい
四月馬鹿鶏卵音もなくつぶれ
饅頭の薄皮あたり天と為す
越後平野の笑い袋が弾け出す
モナ・リザに逢う紫陽花の小道かな
草画にて候夏瘠せにて候
雑学をとろりと包む味噌の垂れ
禁猟区酒癖悪い村の衆
釣堀に恨み辛みの鴨の首

東京都

島田 小吉

捨てられぬ本に囲まれ兎小屋
朝刊を待つ間の長い歳となり
女房をさんつけて呼ぶ山の霧
一年の笑い始めに寅次郎
一本の銚子寝かせて鮭茶漬け
やしろへえ心ならずも揺れてみせ
マリオネット派閥の糸が見え隠れ
定年へ長い振り子を贈られる
仏顔多情多恨を刻む鰻
ビル睨み鼻膨らます鬼瓦

常識を破る器量もなく生きる
風上に置けぬあだ名のつかぬ奴
清貧の美学に揺れる枯れすすき
マンネリが光る葵の紋所
頃合と見て鎌首が持ち上がる
教わった芸より盗んだ芸が冴え
定年へやめて得るもの無くすもの
若い日を秘密のままで共白髪
挫折して寝転んだ日の草いきれ
哲学が崩れた夏の風に逢う

アリバイが崩れるまでの暇潰し
明日を射る一本の矢に刻む歳
地の下に風の香りを知らぬ街
安住の地はあきらめて墓地を買う
口まねの合間に鸚鵡独り言
笑わせておいて笑わぬ目の光
注ぎ注がれ人間臭くなっていく
喋ってる酒場語れる友を待つ
先輩に手抜きを習う縄のれん
窓際の夕陽へ自説曲げぬまま

京都市

山本 礫

泣いていた亡母を東西南北に探す
茫々の風と歩いて臆病で
指弾する人差指のあるかぎり
人を恋い人を赦して風の街
フィナーレはどこに揃えて靴を脱ぐ
懺悔のように空白を打ちに打つ
すぐ約束をするなよ 寒い男だな
すこしずつすこしずつ鋭角を削る
屈折のつづきをお見せ致します
聴いてくださいぐらりと酔っているけれど

テークアンドテークいつもの位置にいる
たそがれを歩く 逆説を歩く
うそぶいてときには空を見ることだ
チャップリンの後姿を思いおり
胸に抱く たそがれ色が拭えない
こころのなかにあるのはいつも嘆願書
逆流をした日の血液いまもある
ドラム缶転がっているソマリアのように
捨てたのは 軽さかな 重さかな
何も言わない妻の歳月を思う

もぐら叩きを妻よいつまでつづけよう
同罪はいやだと妻よ逃げるのか
関節はどこもかしこも冬の音
見覚えのある人だ赦せない人だ
多喜二も修司も天井にいる 眠れない
平行線のままで微熱がすこしある
鉄鉢はまたないけれど旅ひとり
短距離選手のように走ってなるものか
砂丘を歩く 薄幸の日のように

堺市

海堀 醉月

片方の紐に童話をぶら下げる
五分遅れの時計がほくを放さない
背の低い仏像に肛門を覗かれる
空耳ではない 人の仆れる音がする
落ちた椿の長いながい演説
残骨を陰干しにする草木染め
手の届かぬところが痒い老詩人
煙突が傾く スプーン一杯の砂糖
家族がこぼれている たそがれ色の器
終の棲家 牡猫は牡のままで

一片の鱗と闇を分かち合う
マクベスを読んでる三本脚の鹿
老兵の鼻毛で遊ぶ脳死論
武陵桃源 おもちゃの汽車に乗換える
寝釈迦半眼 指の先から透けてくる
英雄と呼んでおこう 異類異形の者たち
半裸全裸のことが呻く紙の劇場
紙の金魚も干物の蛸も泳いでる
素潜りで乙姫さまに逢いにゆく
折れたマッチでできるスリリングな遊び

着地満点 女の靴の宙返り
足を踏み外したまでは覚えてる
町を外れてから霊柩車の鼻唄
キレイだと思つて山火事を見てる
破調句が好きな尻尾の長い猿
バッテリーボックスの土が柔かすぎるんだ
てるてる坊主の偽善に一票を入れる
平和売りが通ったあとに水を撒く
星条旗のうしろに続くモモタロー
空部屋があるのでかくれんぼをしてる

大津市

峯 裕見子

雪の来る予兆逢いたくなっている
修道女もわたしも揺れている電車
風さえも優しいなどと嘘を書く
スカートのふわりと開き死にきれず
タンポポが咲きましたねと誘つてよ
この家で死ぬことにしたかぶと虫
腐ってゆくトマトから目が離せない
約束をしたので鳥の水を換える
歯に沁みるのは水でなくあなただ
握ったら壊れるものを飼っている

眠くなる音を出してるのは誰だ
もう行くのですか象の背に揺られ
火の移る屋根にいつまで立っている
買うておくれよ臘夜のうでまくら
なにを憎んで風鈴の舌を切る
眠りから覚め廃船に火を放つ
確実に届く手紙もビザバイも
えんどうの支えを足してやらないと
動かないので剥製のうすほこり
そこ空いてますかと神さまが来る

衿だけが少し湿っているパジャマ
コスモスの群れるあたりのくすくす笑い
バス降りたところでじっと待ってます
雫するもののひとつを抱きしめよ
きのうより匂いの強くなった指
眠る時くらいこぶしを緩めたい
冬の景やさしい声の人という
飛んでいる鳥を見るのは大好きだ
お豆腐を食べてひっそり死んでゆく
空だけが見え完璧な窓となる

四日市市

樋口 仁

たった一個の豆電球で夜を渡る
ブランコが止まると朝食の時間
追い詰めてしまふともうい回游魚
父の中の男が探す月下の蘭
美しくあれ組板の高音部
錆びた時計ときどき話す癖がある
トーストの焦げ目を朝の輪郭に
終電が西瓜の種をワツと吐く
白いページを食べてしまった逃亡者
削られてゆく鉛筆が父を見る

迂回してゆく冬を温める所まで
胃壁から剥がす行き場のない音符
靴下が吸い込んでいいる寒い汽笛
夜の時計へ割り込んでくる糸電話
舌先に棲みつく土砂降りの天気
街は光で回覧板は眠くなる
疑いながら飲み込む三角定規
金色の色鉛筆で描く卵
きつと男の目玉を焼いたフライパン
凍るから回し続ける洗濯機

抜け殻を春の辞典でよく探す
夕暮れの砕かれやすい父の鼻
原稿の続きを書きに行く海へ
観覧車の一番上で告げる過去
最初の虹も最後の虹もてのひらに
胃袋に抽象画家が一人いる
乳白色の地平線から卒業す
テレフォンカードをたくさん持って家出する
父だけが持つ方舟の時刻表
暗い答を耳の奥から出してくる

宮古市

万迷多

寂寥と名づけた駅をてのひらに
猫やなぎ男のはなしおんなのはなし
悲しげな貌する三度目の飯だ
もう一つのボタンを探すいつまでも
終わりのなきマラソンがある玩具箱
晩夏光少し狂っている人と
ひとりぼっちの嫌いな耳と語り合う
真実を捜しあぐねた翼だな
彼岸雪に女性冠詞を与えよう
魂に着せるものなし枯野原

歳時記のはるかな岸に流れつく
秋の陽に振る透明なさいころよ
告白の途切れて寒い砂時計
疑っても疑っても花は咲いている
とろろ汁旅路を急ぐのは誰か
寂しくて青い密柑をしぼり切る
飯のさだめをみんなルオーの絵の中に
惜命の縄一本が空にある
終の日へ忘れたものの限りなく
わたしを閉じ込める壺を作っている

目刺し達まぶたに海を残したか
悲しまず秋の手紙を書いている
次の世へ行こうと思う回転木馬
雪解けていのちの河は涅槃まで
そしてそして今雪折れのかたちです
生き残っても果ててもきつと蹲る
たましいの深みで微熱持つ小石
引き潮の声は引き潮だけが聞く
死に絶えた祭りをひとつ抱いたまま
命たたんで黒人霊歌聞いている

秋田市

鷺谷美津子

愛された右耳ばかり鳴る夕べ
それもこれも恋と呼べる熱帯夜
抱いているのは鬼かもしれず目をつむる
間違った恋から好きになる帽子
人待てば磨ぎ澄まされてゆく五感
窓という窓に私がいて一人
紙風船ため息まるく閉じ込める
水栽培愛の終わりを予感する
さよならに辿り着けないジグソーパズル
ずるいのは男子供の顔で寝る

別々にウインカーを出す別れ道
私に広がる闇に目を凝らす
汗かかぬ仕事でこんなに疲れてる
様々な事情が同じバスを待つ
句読点打ったら萎えてしまいそで
八畳の部屋に三つもあるリモコン
新聞と郵便は来るひとりきり
刺多い薔薇ほどいつか紅く咲く
幸せになってくれなきゃ恨めない
満開の桜わたしにいい話

愛でられて金魚の紅は深くなる
米をとぐ男の指が白く濡れ
よい妻でいたいと思う雨の夜
邪気のないいびきに嫉妬してしまう
疑う日洗濯物が乾かない
目が覚めてあなたの妻に戻る朝
身の内の罪皆吐けと来るつわり
紅の色淡くし母の顔になる
幸せの重さは三千百グラム
乳を吸う戦う時の顔をして

青梅市

倉富洋子

いつも彼方を目指して結ぶ靴の紐
絶え間なき水音に責められている
告白をすると背骨がやや歪む
一身上の都合で薔薇を食む夜更け
石ひとつ飾り吊うものがある
月満ちて満ちて理科室の骸骨
少女期の残像青はさびしきまま
過ぎ去りしものにやさしきオルゴール
病む肋 おぼろに菊の香りける
醤油差しつとつと垂れてゆくなみだ

旅に出る予定もなく傘を干す
口紅はピンクピンクの立ち直り
水を抱くようにあなたはわたしを抱く
手品師がとりだす鳩のさびしき瞳
日和見主義よコスモスはまだ揺れる
黄昏にわずかに狂いゆく磁石
もう死んでくさい白い鶴を折る
泣きながら徐々に優位に立ってゆく
水硬く冷たく君を拒みぬく
ひとりあやとりがもつれてゆく真昼

婦人科の聖女どなたがひところし
完熟トマト握りつぶせば満ちくる負
百年カレンダールにしみひとつありわたしの死
寒水魚自虐は加速するばかり
犬糞死ますます青き秋の空
饒舌な暗喩で編みあげるわたし
蛇口から溢れるものは常に現在
正気とは何が基準かゴッホの黄
包帯を巻けない場所が病んでゆく
バランスを崩してやじろべえは、今

土佐市

立原みさと

許されてこの世に私落書きす
ライバルへ冬の球根太らせる
少年の鼓膜に残る白い刻
速やかに解凍される無精卵
少年はガラスの坂を暴走す
青い馬なぐり書きする少年期
哺乳類の手が少しずつ退化する
遺伝子のしっぽが同じ極を向く
しまい忘れた夏を少女が擦り抜ける
苺畑の無邪気な毒と向かいあう

月光を昇りつめてもなお他人
淋しくて海半分を飲み残す
雨水以後誰も通らぬ道がある
わが胸におさめきれない枇杷の種
二引く一の淋しさがあるねき坊主
桜冷えわが感情線は水浸し
痩せてゆく影に桔梗を投げ入れぬ
合わせ鏡に女ひとりの満月よ
月光に乳房を反らす魚たち
月満ちて蛇の衣を織りあげる

感傷の糸がほどけぬ片乳房
帰依すれば乳房にかえる桜かな
逆線や乳房ふたつを受け皿に
今もお母のぬり絵をぬっている
針山は母のもろさを映しだす
老いてなお桜の下の手鞠唄
有形無形母の器が深すぎて
菜の花につながれている無期の刑
白い花つないで母の数珠とする
母の影踏いで春が遠くなる

仙台市

てのひらをぎゅうっと入れる深い箱
スプーンで掬うひんやりした未来
抱ひとつとどこまでゆける
もつれ合う無数の紐と暮れてゆく
万華鏡の中で寄り添う破片たち
深い穴の底から戻ってくる音よ
まっすぐ歩く何もうつさぬ瞳になつて
ふりそぐ光の中にドアがある
電車待つ　こわれた指をポケットに
間違っているように赤い実をつける

似たような箱を抱えてすれちがう
真つ青な亀裂を見せて立っている
わたくしの時間を撫でるつめたい手
塚の中をいっばいにしてゆく夜景
指の傷　星がこんなに降る夜の
からだじゅう音にまみれて戻るなり
花を飾る胡桃の家の食卓に
赤い茸がよきによき生える誕生日
昏い器になみなみもらう
てのひらをあたためながら空を描く

西宮市

塩鯖の青うつくしき愁いあり
くちなしの花は汚れていくわたし
手を入れる郵便受の暗がりに
春近しガラスの傷は無数なり
背骨伸ばせばわたくしは塔になる
三月や傷つくことに不自由せず
姿消すわが胸中の聖少女
雪月花わが身をなにしたとえんか
春愁のひとり芝居はきりもなし
雨激し気持ちいいほど無視される

春あたらし好きなものしか愛せない
駅まではいつも送ってくれる人
雨激し言いたいことは言えぬこと
まだ花に間のある下を行くふたり
香をあげばもの狂おしき藤のころ
中心はあなたと決めて描く円
わたくしも梔子の葉も艶やかな
柿若葉ひとは黙って愛すべし
六月の人みな孤独傘をさす
逢うたびに複雑になる枇杷のころ

高橋　かつぎ

してあげられることは一緒に雨に濡れること
かわくこと嫌がっている濡れタオル
墮落する踵の低い靴はいて
きのうより長くなったか壺の首
あっけなく途中でおわるオルゴール
永久にもうはえてこぬ永久齒
暑くも寒くもいま哀しくもない
忘れられてもいつも成金草元氣
ハリのある茄子に負けてはいられない
握りしめている傘だけをいま信ず

守山市

金びかの眼鏡を乗せる鼻の孔
こんぶにかこまれてこんぶを売っている
警笛を鳴らし大きなバスがくる
波の音貧しい村の写真集
うす暗いところへ裸逃げてゆく
犬連れてくるからふいに走り出す
ふんわりと畳の上に置いてみる
泣いたわけ教えたらかという子供
仏壇の水のこぼれたあとを拭く
ビニールの袋に入っているごぼう

如月の隅でみかんが徴びている
呼ぶ声が聞こえる雨は止んでいる
ひとり住む母へコロッケふたつ買う
赤いきれ吊るすぶつからないように
なんやかやあってズボンの皺のぼす
今植えたところ斜めになっている
シンブルな姉が帰ってくると言う
泣くように水が流れているところ
グッドバイメロンの皮はペラペラに
似たものを探して眠ることにする

徳永政二

逃げられぬ宿のタオルを干している
雨の宿九九を覚える声がする
二度とない人生だから泣いている
まんなかで折れた梯子と眠る夜
エンドウの花がこころにからみつく
ほんとうに飛んでみたいと思う鳥
それではと海に向って歩きだす
クレゾール液に浸している震え
ねころんで空に浮かべているお金
象の耳取れたことには触れず寝る

北海道

伊藤紀子

朝粥よ森羅万象ふきこぼし
文字刻む石は妻よりやわらかい
薄日花影碑文の風が立ちあがり
満月よ珊瑚のように子を産まん
湖は揺籃赤子のような月が降る
転生よ桜ん坊の種子を吐く
遍くひかり　赤ん坊サクランボウ
湖きらり童きらきら多縁なり
落標霧晴れるまで波果てるまで
渺渺と湖の荒れくる陶工房

水の村ピアノ連弾血の深み
母に汲む水は俄に鎮まらぬ
花藤淡く水盗人はかいごろす
まっとうな高さに村の望火楼
霞着て村の通りを足早に
靄の村ひとの縁はまみどりに
村中の肉声つむぐ水の繭
藤匂う人より暗き幹をもち
芋の芽が伸び賑やかな性悪説
同胞を捨てたメロンも売られゆく

合縁の桃の村にも回し文
一身に憎しみを負い小水葱伸ぶ
疎生カボチャの蔓と手をつなぐ
多情とはやさしさとは　擦過傷
ゆでこぼす菜花春愁エトセトラ
花嫁の半身に降らす不意の雨
破婚見てきたらし残暑見舞
発禁本からりと雨があがって
総立ちの稲穂を寒い祭り過ぐ
残り雪卑怯に生きる愉快かな

福岡県

松永千秋

桃の花びつしり咲いた予告篇
 毀れゆく確かなものと夜に
 哀しみにいちばん先に触れる指
 父が叱っているのは姉の影法師
 一通の手紙が届き乱になる
 いつかは花になろうと思うくすり指
 弦楽四重奏愛はおしゅべりな
 月光にゆっくり解く花結び
 野ぶどうは摘まれ汚れて行く少女
 胎内へするりと還る月の橋

ふるさとの空と比べてばかりいる
 ひらがなも母のころも哀になる
 大根の重さと階段をのぼる
 水音が途絶えた時は亡母を呼ぶ
 美しく指を洗って森へ行く
 以心伝心ひっそり開く枇杷の花
 青いレンズを当てると光り出す疼き
 何を以てわたしを満たす蟬しぐれ
 惹一本を刻む一生の仕事
 かもめ来て我が風景を淋しゅうす

わたくしは無視されている猫の耳
 今も私の麦藁帽の中の海
 あたたかく哀しく湯豆腐を食らう
 乳房ふくらむとても哀しい弱点だ
 情諸不安洗濯ものは生乾き
 男は今日もおつうの布を売り歩く
 方法が無くて海まで来てしまう
 オーイオーイと呼びつづけている今も
 私を喰いのめしている未練
 夕焼けがとても哀しい河童一族

東京都

菊地俊太郎

ゆきずりの根株に体液をこぼす
 木のベンチに張り付いてしまった手足
 手荷物之地べたにおろす或る決断
 川底の時計が今日も動いてる
 呑みかけの鎮痛剤を花鉢へ
 ばら園に長居し過ぎた全身打撲
 脂っ気の抜けた帽子を折り畳む
 階段を落ちるピンポン玉の音
 吊り広告ざわざわ胃液ざわざわ
 うたた寝の広場で失った前歯

背もたれになる古本を積み上げる
 艶やかな落日に酔う囁れ声
 一本の藁をくわえて藁に寝る
 門柱を光らす虫たちの唾液
 噴水の音だけとなる街は空っぽ
 ストロローに詰まっていたのは母の髪
 敷石を嗅ぐ生きものの業を嗅ぐ
 万策つきて水飴をかき回す
 日日平穩妻は鉄を研ぎに出す
 復縁をささやくぐい呑みが一個

ぬか味噌の中から日の丸の小旗
 アスファルトと妥協して来た肉離れ
 水指しの水が腐った二重ドア
 たましいがガラスの壁に突き当たる
 動物園の鏡に横顔がうつる
 落ちそうな耳にあてがっている小鉢
 木漏れ目を分け合っている肥満家族
 長い長い休暇の果ての化粧焼酎
 秋しんしん机の上の皮むき器
 人工歯根にかぶさってくる全体重

千葉市

西秋 忠兵衛

一九九四年 霧笛が鳴る
 鉛筆を削ってくれたツル・アキラ
 傘立てに銃が一丁立ててある
 額縁だけのあたらしい戦争展
 そして三宅坂から降りてきたポチだ
 震ふる下に職業安定所
 骨のない魚がおよく水族館
 トンネルに宇野重吉が佇んでいる
 足を止めたのは五月が笑ったから
 某年某日しずかにとまる洗濯機

音たててめしを食ってる現住所
 留守番電話こちらは沖の風ですが
 六十五さくららはさくら百合は百合
 水枕サマルカンドへ来てしまふ
 五月闇まして二本の箸の影
 夏雲や四球スーパージオ鳴る
 母の箸から金時豆がころがった
 姉の日記に途中下車した町がある
 サルトルは読まない妻のふくらはぎ
 妻という不思議な海に棲んでいる

地球にすわってハゼを釣る
 黄色のままの信号機
 縄文の人に煙草の火を借りる
 泣きながら俺の影ついてくる
 鯛焼くけむり 人を焼くけむり
 東京の人東京を駆けている
 コンビニへ降りていく深海魚ら
 四万十川ほとけの時計を食べてしまふ
 笠智衆の帽子が消えた土塀の長さ
 コーヒーを飲むとほくに呼びかける

東京都

矢島 玖美子

遠くまで行くはずだった駅にいる
 花柄の傘はもの欲しげにひらく
 六月はあなたがなくなる季節
 君の髪がわたしの知らぬ間に伸びる
 少女ではないわたくしに刺さる雨
 目をつむる あなたがいないくても平気
 赤ちゃんは赤ちゃんのまま冬になる
 魔がさしてバレンタインのチョコを買う
 紅水晶ふりむかせたいひとがいる
 春よ来いあなたを脱ぎ捨て春よ

杉の木も曲がってみたい曲がれない
 美しい別れなどない 焼却炉
 赤電話とり残されて咲いている
 どちらかがはずす別れのタイミング
 自動改札に拒まれてうれしい
 嫌いな人にもらったものを食べている
 抱かれて少し太ったのがばれる
 くだらないことも話したい あね
 親切にされて我が身の薄汚れ
 ふるさとの天気予報を見てしまふ

出逢いの日ふわりとかけられた手錠
 傲慢に素肌晒して秋の中
 許されて寄り添う雨の競馬場
 潮風にゆっくり錆びてゆくわたし
 三十の恋は静かに押し通す
 わたくしが死ぬ日を知っている 誰か
 添い遂げる覚悟問われて月の道
 精一杯秋には秋の顔をする
 生きていくための小さな傘を購う
 君と同じ空気を吸う 東京

東京都

少年のたてがみ崩れ震ふる
阿片よりコクトー愛す寺山忌
犬の舌 剃刀舐めて真ッ赤なり
バイロンの一行越えてみたき冬
胡桃割る少年の目に海青し
心臓に薔薇の星降る詩人の死
火の鳥を殺やめ海鳴り遠くなる
振り向けばみんな忘れている鵜
父の背に落ちる夕焼け灰となる
くやしさに小さな海をためている

致死量の月光呑んで阿呆消える
火の森でおんなと蝶になってゆく
逢えぬ夜 麒麟の首は濡れて立つ
唇が飢えて淋しいヴァイオリン
逢いにゆく夜の傾斜に身をまかせ
包丁のおんなを抱いて餓鬼草紙
たましいの暗い峠に雪が降る
駆け落ちの小舟の櫂の朱の眩暈
原罪を忘れて寒い足の裏
求め合う男肉女肉の厩坂

平 宗 星

銀河抱擁 空から河童炎之墜ちる
泥眼の奥に淋しい村がある
手鏡の雪降るなかに母がいる
鳩尾に炎をためて逢いにゆく
葬列のなかの一人に影がない
哀しみを幾山越えて河になる
絶望の虹をまたいでゆく揚羽
たましいを売れずに犬はうずくまる
何もかも捨ててひとりの風となる
火の面を削ぎ落しゆく枯野抄

青 森 県

タイヤローラー道草しない子が通る
振り向いた向日葵ほっとして枯れる
一匹をにぎやかに釣る日曜日
置き時計好きな時間を指したまま
言い切って少し悔いてる干し鰯
後れ毛を数えて自動ドア閉まる
針になる言葉を少しずつ覚え
泥上げの泥に口止め料を出す
底無しの堪忍袋になり果てる
振り向くと僕の轍が消えている

にぎやかな夢を見ている干大根
雪に埋もれて廃船の安堵感
居心地がいいから群れを抜けてみる
嫁がせてまだ咲いている桐の花
輪廻からはずされてゆくやがて人間
泡ポコン泥鰌の夢が消えた音
ポテトチップスよりもろい骨拾う箸
背中から嵐火花になってゆく
石段高さを読んで風になる
羊雲おまえの肩はお人良し

戒 修

今からは旅人となる雪の傘
無防備に笑ってしまうトタン屋根
てんでまり命の果てへ突く手毬
ゴミへ出す袋が足りぬ我が偽善
不幸線路は交差し終わる
酔い覚めて修正液が乾かない
やさしさが重荷になって小糠雨
遠吠えを呑み込んでいる水墨画
油一滴のたち回る水の色
盆が往く宴が終わる火消し壺

新潟 市

照れ笑う男と泣きながら歩く
分身の術凡夫ひとりが出奔す
古疵を逆さ睫に合歓の花
赤い沓古び飛んでる水たまり
饒舌な合鍵が解くバラの蕊
遊女たらむ桜桃結ぶ恋愛ごっこ
鯉の尾のふりぶりとして恥じらいぬ
玩具欲し抱く臍の緒が乾涸びる
ボーボワールのコルセット拾う芥子畑
平凡と言う逃げ道に草の花

溺やかに生きたし麵の湯が滾る
水たまり眺めつつ持つ男の荷
こわしても壊しても乳臭き影
虹幾色 君の不幸の数だけさ
組紐のそこから乱れてのリズム
ぬいぐるみ抱かされ戻らぬブーメラン
倅せを問えば口だらけの鯉だ
如月の満月へ折るスパゲッティ
ティーブルを叩く君に震るる雄蕊
次第に手垢で黒ずむ縄糸

谷 沢 けい子

君の影射貫く事さえ罪ですか
驚草へ無様な女にはなれず
僧衣に鱗一枚残し道成寺
乾く涙の速さ寝釈迦の積む埃
内出血消えて男をイニシャルに
穢さぬ十指で神に委ねる怨嗟
白毛女哀感走る髪の前
慈愛には遠い愛にて蓮の玉
愛失せてヒト科に戻す水晶玉
キュンと雌蕊振られ上手にチューリップ

青 森 県

不自然な形ですごろんと丸太
親という縁へ丸太ぶら下がり
拳さえつくれぬ手 太宰の文庫本
あがいてもあがいても春の曇天
ドライフラワー花には花の尊厳死
手のひらへ下弦の月が泣きにくる
頬杖の眉間を雲が動かない
泡なるを南無南無南無と吐きつけ
一人抜き二人が僕を抜いて行く
掌は無情去る人ばかりだと思ふ

しあわせと生きる理由が違ってる
思い出を荷造りしてはまたほどく
桃の道何を忘れて来たのだろう
耳に手を当てれば遠い遠い霧笛
手紙書く繕いきれぬ僕が居る
笹舟がいろはにほへとから消える
ああ母よ無名戦士は屈葬に
朽ちてゆかんと夏蛙はみどり
やさしい雨を忘れていたよ葉月
石榴真ッ赤も一度背骨組み立てる

福 井 文 明

秋雨きてレモンの輪切り薄くうすく
海ひとつ鎮めた胸の実雨天
夢二の絵の少女はらはらこぼれ萩
きらきらと芒がゆれる死者生者
白鳥死す硝子の部屋におく林檎
上弦の月をかじって冬の蠅
傾きかけた心で待っていたことは
地吹雪の呼吸を聴いて居て独り
まなざしがやさしかったらそれで春
しなやかな呼吸わたしの居る所

弘前市

矢本大雪

漁火はしゅらしゅらと揺れちちは風ぐ
この海を捨てん 木枯らし重ね着に
渴愛の蝶ゆく 潮の目ははるか
ビロードの海くちずさむ 夕陽寂靜
枯れ野にて暗誦するは青い伽藍
すすきなびくボレロのなかを時の舟
うみへ撤く骨灰 法悦の声あげて
胃壁より剥がす日本海無明
影はつばくらめ 低く低く沖へ
海哭きぬ炎が雪になる刹那

冬鳥の呼吸 銀色に喪のかたち
なき浜でとどえる挽歌 黒吹雪
地図に破船 手をのばしても届かぬ瑠璃
舌頭で死父をころがす 河口消ゆ
時化の桃 この世でみられない誦経
黒衣脱ぐ うなじに流れ着く梵字
死父と佇つ岬 むらさきの雪が沸く
指は魚に魚群は雪になる此岸
潮の香の淡雪 指に渦状紋
冬濤よ 五戒をことごとく犯す

潮位低し 爪は汚れてゆくばかり
涅槃まで海図の親潮に曳かれ
海を焚く 雪ひとひらになる流離
雪は白蓮まといえ消える潮流か
海潮音 鉦ちぎれて渦巻きぬ
水底の冥さへ沈む 没日啜えて
彼岸より遠きポストへ吹雪かれし
海猫鳴くは愛染 剥きだしの耳よ
うなじより碧くこぼれる 雪 桜
いのちみな吹き寄せられて濤の華

黒石市

千葉風樹

棺に蓋したらみんなで朝ごはん
骨拾うもう摩周湖を語れない
イカを剥く ひとの不幸はすぐ忘れ
死後の世界はあるのだろうかたつむり
ほくのかげがれつしゃにひかれてる
喉が渴いて絵本立ち読みしています
押花の無口恋しくなる日暮れ
猫の子あげるそんな広告見てる今日
社会鍋揺らして少しオーガズム
とほととチロリン村へ還る馬

さみしさを吐いてしじみが煮こぼれる
こっとなこっとな荷を負うように脈を抱く
雨音がせぬ湯豆腐の中的首輪
釈迦の顔した犬だと気付く……独り
俺に食われて飯たちは犬死にか
小川さらさらカウンントテンを聞くリング
酒に浮んだ一寸法師に御座候
白菜を見ているブランコに揺られてる
借り物の命 呆呆鳴る土鈴
空っぽのポストに涙わつと出る

靴履いたままで死にたしいわし雲
ストローをずんずんずんと来る軀
恋がしたいよ点滴ガツガツ食べてやる
便箋に牡丹雪降る四十の恋
好きという言葉が言えぬゴム鉄砲
髪刺つたとたん一円玉になる
愛告げる虫歯の穴に触れながら
四十五歳茶漬喰う音上手くなる
森へ森へと母閉じ込めて手を洗う
父の名は問わぬ小川が濁るから

高松市

みとせりつ子

くちびるが乾いてならぬ春枕
爪立ちて火照る想いやくるくる踊る
春の花くらりと匂い抱擁す
湖のはるかにわが愛唱の唄のあり
鳥霊や河口を離れ人肌に
水の唄かと耳傾けん腕の中
夢とだえ父の手枕ほしやほし
月百夜 水ヶ原を父還える
後背の父は彼の世へ貰い水
うしろ鏡の母に泣かれてしまうなり

化野にはたるを重ぬ まぼろしか
太宰忌や誰か倒れる六月雨
ふるさとは一本の樹の上にある
夏帽子 少年消ゆる水の画布
人恋えり乞う身代わりの紙子仏
夏瘦せて耳にさびしきヴァイオリン
そは曼珠沙華父へ禱りの白い雨
悔恨や子の名母の名返上す
悲は時に鳥撃ち足りぬ赤い山河
落下せよ 月 炎上の河に

月華散る寺山修司の喉あたり
水冷ゆる秋の最中のわが手足
ほうほうと裸馬ゆく芒の群れか
父の芒絵 恋塚を萩まみれ
死者にちちあり父の屍を掬い上ぐ
幻馬に跨る 絶望よ あくがれよ
姿なき夢のひとつき旅立ちに
号泣の馬を放てし雪の原野
雪の音のなつかし竹の村の名は
蛇や この世を昼を後にする

名古屋

吉田三千子

薄暮なり むずがゆい芋の皮落とす
毛管を昇りくる地下水の速さ
揺られ揺らされ人類香れ
たやすき位置に風のほこらよ
綿の水 青白き口中に流す
弾痕の絵本に白い夢の夢残る
ああ耳も目も忘却の海に墮ち
少し豊かに遊ばせる蒼い獣
夜の底へのあさはかな濾過
泣き止まぬ人 満月は背後に

糸端に冬降りてくる 鍵ホック
雨音に叩かれて朝の呼吸する
そして百舌 一瞬の朝をたたむ
道連れの雲が一変しないよう
死はいつも朝顔の開く路地
櫂の奥へと私が消える
七月の積み木に迫る天の川
一房や 知っていますか背の丈
遠いランプと気がふれてしまえ
約束は紙に包んだ桃の数

トーストは菌型にちぎれ夕まみれ
空は他人で遠いもの 吃水線
夜の真下の勢いの実よ
曲線に雨 袖の短い服崩す
玩具屋を出て一度だけふりかえる
いずれ水のナイフにて死ぬらしい
古い水着のおんなが歩く夜のプール
梔子や ふとどきな髪洗いあげ
背の汗に訊ねる高い橋ありきと
再びという意識 種ごとの黒葡萄

和歌山市

恋という元気の素を食べている
八合目あたりの恋が面白い
時は今 りんごたわわに熟れている
謎解きの下手なおとこを道連れに
ポテトチップス かるい悩みを噛みくだく
猫が好き中途半端な男より
戦略として手弱女を演じきる
風船を割って今夜は魔女になる
さよならを先に言わせる憎いひと
恋終る りんごに歯型つけたまま

木本朱夏

時雨きて身を庇うもの何もなし
木枯に仄かに思うひとの距離
パン種が膨らんで行く罪の刻
宿世かな悪女にもうにぎりめし
信号は赤 突切ってゆく恋情
愛したひとの数だけ駅が胸にある
私という川を渡った男たち
憎いおとこを袈裟斬りする帯が一本
椿散乱 快楽に似たる相對死
生き恥のひとつやふたつ曼珠沙華

夏の疲れがすこし滲んでいる手紙
セイフティボックスに干涸びていたわたし
アリバイのために指紋をつけておく
烏籠へ男は帰る金曜日
驟雨きてやさしい言葉聞き洩らす
雨男と雨を見ている秋の窓
減点法 いつかわたしが消えている
失なった時間を抱いているたまご
住み慣れた街で甲羅を干している
五十には五十の恋よ時雨の記

小樽市

雪無音しのび寄るのは会者定離
突然の雪を降らせて喪のお客
神にそむいた指紋ひとつの雪手形
連山きさらぎ過去の余燼がてのひらに
逆縁の山茶花ひとつ散りふたつちり
夢の中亡兄とよく会う羅生門
独楽倒るその一瞬の言葉とは
自由とはこんなに寒い姉の部屋
椿油のつばきが母を憎んでた
返せない恩 柩を花で埋め

斎藤 はる香

樹氷並木を往くのは美しい迷い子
背を送る踏切りまでの冬銀河
ひび割れた鏡の奥の雪景色
生き下手死に下手縄一本が立っている
老母はいまでも私の窓を拭きに来て
ふるりの水位は鳩尾を越える
割烹着無数の霊が沁みついて
鬼さんこちら石ころ道の石になる
遠花火迷える森の道しるべ
結果ばかりを急ぎすぎたか君子蘭

福岡県

長井 すみ子

影は光を追いつ越してゆくわたしの野
じゃんけんの鉄が錆びて来たようだ
昭和史の彼方に父の忘れもの
明暗の境界線に咲く薊
胃の底の砂をあつめてまだいのち
足音はきつと去年の鬼だろう
一呼吸 ナイフはもとの位置におく
正解をくれぬ羅漢と逢う冬野
白旗を結ぶ杭だけ のこされる
モノリザもわたしも杵を出る いつか

短か世の石段一つずつの咎
糸毬の芯から老母をつれ戻そ
今一ばんかなしい言葉 おともだち
リングの木植える童話のあるかぎり
赤い実を食べる詩人であるために
美しい絵本の中の奇形魚ら
喜劇かな 憎い男のシャツ洗う
折りかけの鶴をのこしておんな去る
すすき野に隠すわたしのやま
真実はうしろの闇が消すだろう

鰯雲おんなの一夏がうねる
八月の海に沈んでゆく音符
かなしみを丸めて今日を風葬に
母の骨 雪より白く雪より軽く
闇の一ばん深いところに咲く牡丹
修飾語つけるとさむい父の帽子
左脳ゆっくり愛はことばを選びつつ
乳房からつきつきに湧く火の台詞
潔斎は終えたか蝶は産卵期
原風景の白い道から忌が明ける

仙台市

宮本 めぐみ

コップの中にじわあっと浮いて来る仏
寂しくて爆笑劇を見してしまう
目の前にぶらっと下がっている絆
切り口から滴るものに封をする
きのうと同じ景色の中で髪を梳く
秋霖やばつさと切りし黒髪
中休みしてから咳が止まらない
雪道で消したわたしの影法師
泣き止んだ目に鮮かな春帽子
残照の中であしたへ梅を干す

石蹴りの石転がりぬ秋の坂
背後から呼ばれたようて手を洗う
春愁やぐらり傾く命かな
音たてて崩れるものに積み木 愛
裸眼では見えぬ幸せ不幸せ
妥協する度にひとひら桜散る
残り時間がときどき見えて来る駱駝
真直ぐに背筋伸ばして亡父に会う
哀しみがぼとりと溜る筆の先
人赦す波のうねりの高さかな

一片の雲が視野から立ち去らぬ
ひまわりを見つづけている胸の疵
自分史に揺らぎの跡の二つ三つ
共鳴をしてから骨が脆くなる
ボタン千切れる ひとつの闇
終章へ仄かにペンを走らせる
やがて終わるやさしさこっこ鬼こっこ
曇天がつつき真白き傘をさす
幕切れはほろほろ花の散るように
飯の世の雨降る日花散る日

北海道

桐越千絵

青天よ爬虫の街の片隅で
雲走る産声の街わたしも走る
トマト結ぶ発光体の嫺かな
響き合う山河の霊と児のピアノ
満潮をゆっくり泳ぐあなたの手紙
嫺いま筆のように生きねばと
薔薇ひらく一つの鍵は血の中に
鈴蘭の軒に明日の風を待つ
花の雨言葉少なく樹を起こす
北の椅子にいのち問われる薯の花

銀河系を辿る足うら光らせて
うすきあばらに墓の道晴れ何処までも青
グラジオラスの朱は折れ馬の貌動く
言葉いまかくあじさいの白の中
児の合唱嫺に河口ひろがりぬ
ひまわりの種青い炎を約束す
わがために立つななかもど水美し
地球に異変鉛筆いっぽん研いでいる
失禁のノート大事に持ち歩く
うかうかと本音の受話器津波来る

むらさきの風に討たれて死ぬ日あり
喜劇いま秋天抜ける釘打つひびき
秋を着て紙の橋行くうつつか
花の会話冬至の音にかぼちゃ煮る
手袋を落とした坂に舞い戻り
真冬日は軽音楽に身を包む
法華経とゆっくり渡る冬の橋
遺言はありや無しやと豆を煮て
あかつきに鉛筆走る背後霊
嫺いま際立つ青を欲しくなり

京都市

奥山晴生

思い出のビデオに雪が積もりだす
むかしなら三石二人扶持の椅子
断崖に主役の椅子が置いてある
状差しの深い情けと春を待つ
胸をたたいて男は戯画をいくつ描く
錯覚を吸うストローが二本立つ
鍵ばかり掛けて豊かと言えますか
生き生きしてる殺意を抱いているのかも
水の欲しい背中が並ぶパチンコ屋
金をかぞえる顔がうつっていた鏡

アハハハと笑って腹が空いてきた
親友の中の一人に猪八戒
なんでもない話に満ちている夫婦
駅のトイレが奇麗だきつという街だ
動物園の空気に軽くしてもらおう
こぼれ萩純という字も過去形に
風が目に見えて辞表を書いている
神無月妖しい桃が浮いている
くちづけが済むまで待ってやる斬首
花屋も冬で恋の喪服がまだ脱げぬ

悪に馴染んで十四色の絵が描ける
シルバースhirt優しく見せているだけだ
何時かおまえも縋った杖を憎みだす
三日目が奇麗斬られに出て行こう
これが答えか縄が一本置いてある
ライバルの表彰される日を休む
冬が長くて三島由起夫にあこがれる
ねずみ火花に終わった僕の本能寺
そして僕も歴史の底の石になる
一滴の水と河口へ流れ着く

高槻市

河瀬芳子

夫婦別姓 温いごはんが炊きあがる
ルノアールへ落してきたピンクの溜息
折り三味ピサの斜塔のさむい日月
宙を睨んで冬の仁王の波うつ肩
桃色遊戯に飽きた酸欠のナイフ
プライドが重くて歩けそうにない
まるめて捨てないでください いのちです
運命線がさむくて春帽子を捜す
組板の濡れてる温かい港
竹とんぼは落ちて竹とんぼだと気付く

キリストの絵が疵口に貼ってある
風呂敷いっぱい夕陽を亡母へ手土産に
クレヨンが足りなくて象は水玉
囃されて柩の中へ入ってしまう
影もおし黙って闇をみている
トランプマンの投げてきた一枚の枯葉
病めるひとあり紫陽花は嫌い
どこへ行くのか男の胸の無蓋貨車
戦闘準備 おんながエプロンをつけた
洗っても洗ってもいちまいの鱗

森の絵本に象の足跡だけ残る
ペキペキと鳴る霜月の父の肋
月は月いろだった象形文字のむかし
あれは縄を綱う音夕日落ちる音
欠伸を噛み殺しているルノアールのニンフ
天が重くて屈伸を繰り返す
ついぞ笑わなかった天皇の白馬
アッと叫んで真つ赤な太陽は落ちた
父逝って父の裸木いまも裸木
母逝ってやがて陽溜りは消えた

松江市

竹内すみこ

八十歳の姉に押される車椅子
頂くもの何もなかった誕生日
ベッドから同じ景色を見て二十日
花束が疎しくなる車椅子
千羽鶴色が褪せても千羽鶴
病院の前を流れている川よ
風船は約束などは気にしない
萬緑に包まれひとりだと思ふ
普通のことをとても大事に考える
野良犬の目に憧れている私

職退いて優しくなってきた指紋
すこしずつ火薬を溜めて置くのです
嘘乗せた電車が通り過ぎて行く
脱け殻が今にも歩きそうな蟬
毒薬がぐつぐつ煮える春の鍋
うかうかと春の電車にひとり乗る
月の夜は古い木馬に乗りたくなる
私の無実の証何もない
悲しくてゆっくり食べる夏みかん
海岸でひとりの人を待っている

しばらくはまるくなってるまるい虫
背もたれを信じすぎないようにする
耳掃除していい話ばかり聞く
腹立てる度に小皺が増えてくる
懇ろに遊ぶ私の残り時間
試歩の日に一番泣いたのは誰か
白鳥の発つ日車椅子を発つ
背を伸ばす明日もいい日であるように
ゆっくりと歩きゆっくり蝶になる
生かされている優しさを返すため

ねずみ火花を仕掛けてみたい椅子がある
噂しか流してくれぬ花キャベツ
ひんやりとする目が一つ幾何模様
眼帯をはずし景色が二つある
経文というゆりかごの中にいる
絵本から戦車が走るかもしれぬ
乱丁のページに雨の音がする
クレパスで描く人間の影の部分
炎え尽きた男をたたむ風の椅子
人間のかたちで乾く影法師

砂川市

マンガ人生笑って死ぬるかもしれぬ
曲った胡瓜悪いことなどしてません
煙らないコンロで焼きたいわしの目
夕やけの雫を鯉が食べている
酸性雨桶に傘を入れてやる
落丁のページは山羊が食べました
泡のような話に知恵を借りにくる
おたまじゃくしは魚の夢を忘れない
点線で囲むと玉手箱になる
ボタン穴おまえが火つけ役だらう

大橋政良

竹トンボ人工孵化を考える
傷ついているのか後ろばかり見る
火の独楽になれよと風の野に放つ
考える輩考えてばかりいる
トラクター野にひびかせている貧困
ポケットで男の神話風化する
体温が伝わって来る屋根のいろ
オフィスで蟻の漫画が売れている
試行錯誤赤い魚を買って来る
盃の底で遊んでいる思想

大東市

沖に青鯨少年に微熱のナイフ
鳶這う館体温の赤と黒
溺れたのはデパートの家具売場
劇場は空っぽ解体船のドラマ
神が許した林檎と羊水を保つ
母の杖になれない枇杷の木葡萄の木
地下迷路ガラス切るガラス切り
扉の向こうで透明になる黒猫
冬の絵にある灯台と自転車
夏草刈ってひやひやと下半身

哲学の亜流が好きは山水画
弥縫策女に二つある乳房
紙の世の紙一枚となる柩
梅咲いて小面の舌濡れてくる
夕焼けのうしろが正面蛙も僕も
鍵束を鳴らして完璧派が通る
不甲斐なく振り向く青きラムネ瓶
山羊が喰べてるずっと昔の絵葉書
汚点日に晒し墓が抱きたくなる
面会謝絶の戸を叩く夕汽笛

柿木英一

ゆっくりと梯子を下りてくる鈍器
祝杯の遠近法を隅で見る
平気の平左でみな平成の平和論
神話崩壊蟻はその日も蟻の列
銀行の隣のパチンコ屋の雪崩
竹馬で転ぶ政治家なら信ず
白薔薇は凜とお后のさびしき
正論と反論旅客機は落ちた
移動時間が短くなった教祖さま
揺鉢の底で書いてる現況届

「生き方」「志」を大切に
樋口由紀子さんを推す！

尾藤三柳

歌誌「未来」（近藤芳美主宰）の五百号
記念大会席上の「前衛四十二年」と題する
講演の中で、塚本邦雄は前衛短歌の手法に
ついて「パターンさえまねれば済むのな
ら、器用な人は三カ月でマスターできるで
しょう。だがレトリックのミミクリーで済
まないことは自明です。学ぶなら、歌人と
しての生き方です。新しい文体をつくりだ
さねばならないという志です」（同誌4月
号）と述べているが、これはそのまま現代
川柳にも当てはまる。

レトリックのパターン化ということは、
前回にも前々回にも感想として記してきた
が、Z賞の応募作品に限らず、現代川柳の
水準を維持しているのは、極端にいえば、
テクニクである。「残されたのは、テク
ニクだけだ」とは、すでに二十余年前に
中村富二が喝破しているが、彼のような偉
大な創造者を除けば、テクニクそのもの
がステレオタイプ化しやすいということ
である。

テクニクが、「新しい文体をつくりだ
さねばならないという志」を忘れ、無難で
居心地のよいパターンの中に安住してしま
うと、性別や年齢差、地方別などを含めた
作家個人の顔や「生き方」が類型の向こう
に隠れたままで、見えてこないものである。
マイム・ミミック（真似ごと）とは言わ
ないまでも、枯屈な文語、「や」「かな」
の安直な濫用など、形象化の画一性は、現
代川柳の一面面をなしている。

ゆえに銚衡に当たっては、個性とオリジ
ナリティに重点を置き、作者の顔が見えて
くる作品に焦点を絞った。
それにしても、三十章の作品を過不足な
く揃えることの難しさが、各作家の作品相
互間の落差として見られた。中には、同一
作家とは信じられないような作品が混交し
ていて、首を傾げさせられることもしばし
ばあった。
例えば、特選に推した樋口由紀子さんの

作品の中にも、

求愛や筆にたっぷり墨をつけ
など、箸にも棒にもかからない通俗発想
が紛れ込んでいたり、結局は、こうした
バッドマークの少ない一連を選ぶことにな
った。

その点で樋口さんは傷口が小さかった。
押し入れに馬を連ねて消えてゆく
和軍笥の把手に長い汽笛あり
くるぶしに無明の毬を遊ばせて
横顔が打ちあげられる昼下がりに
すぐれた感性を窺わせながら、かつ余分
な力を抜いた端正な句姿には、しずかなひ
ろがりがある。読んでいて、作者の息づか
いが感じられることが、私をとらえた。

秀逸三作家はいわば個性派といえよう。
海堀酔月氏の批評に根ざした硬質のユーモ
ア、秋元深雪さんの異質な視角とメタフ
ア、坂井眞由美さんの放り出したような口
調と風景のおもしろさを、それぞれ採った。
テクニクだけが先走りして、「うまい
句」のオンパレードになってしまふこと
は、川柳の危機だと私は思っている。だか
ら、もう一度原点に立ち返って、塚本邦雄
の言う「生き方」や「志」を大切にしたい
ものである。

選後に

「自分を書くのだ」

寺尾俊平

正確にいうと私は二十八歳の秋から川柳を書き始めた。その時代の世相の背景のあるなしに拘わらず、なにか新鮮で瑞々しい感じがその初心時代の作品に残っている。懐かしいというより、その若さに戻りたいなどと強く思う。放縦を極めた生活の中で、深刻な事柄など全く考えなかった。人事係に七枚めの始末書を提出したその直後に、川柳を書き始めることになったのであるから、想念とか陶酔など全く意識していなかった。いつでも止められるという自由なところと、次から次へとよい先輩に巡り会えたという、まるで奇蹟みたいな経過で今まで川柳を継続している。

今回のZ賞に、吉田浪を推す。作品は歳を重ねることに、彩と艶が淡くしかもむだな虚構がなくなり、おんなの匂いが仄かに漂う。いつも写真のこちらに浪が立ちつくす。秀逸の二に倉本朝世を推す。朝世の繊細な感性は薄い紗の幕の向こうの劇のように、あえかな幻想を誘ってくれる。秀逸の二は佐藤岳俊を推す。去年私は兎作の津軽と南部の旅をした。佇立する穂のない青い稲から、昔の女衞の姿となぜか岳俊を思った。そして彼はそこを書いた。秀逸の三は前原勝郎を推す。男のやさしさに溺れたのである。寡作家の勝郎の三十句は凄じい努力であろう。佳作の十二氏の作品を列記する。蟻の曳く音はまさしく他界から。波の音貧しい村の写真集。罪ばかり数えて神の生臭し。私に広がる闇に目を凝らす。欲望というやわらかき水の音。和尾

有形無形母の器が深すぎてめか味噌の中から日の丸の小旗。少し猫背の母と二人で墓洗う。骨肉といふうたかたを兄妹。胃袋に抽象画家が一人いる。歳時記のはるかな岸に流れつく。迷多風が目に見えて辞表を書いている。晴生私は旅好きであり、大会好きであるためになにか一年中旅をしている。そして、誰彼と語り、そして飲んでい。そして酔うと私は言う。らしい。「自分を書くのだ」などと言う。らしい。随分と昔の話である。東京のある場所です。片柳哲郎さんに会ったとき「川柳は感動です」と言われたことを鮮明に記憶している。なにしろ、彼は生まじめな人物であり、私は自堕落な方であったので、なにか気押された感があった。しかし「川柳は感動です」は私の成長期の大きな柱であった。社会そのものの変化から川柳離れの傾斜が激しくなった。しかし、川柳を離さない同志がいる。私は酔えば「自分を書くのだ」と言い、さらに「川柳は感動なのだ」と呟やく。みんな曖昧だが「そうだ」と頷いてくれる。

選後に

桑野晶子

雪の芝生も卯月の陽に、数日を俟たずして萌葱のいのちが乱舞しはじめた。きのうよりきょうを、今日より明日へと漲っていく生気は明るく頼もしい。応募作品を拝見して、あすを切り展こうとする作家たちの生気は正に萌葱いろ。作家イコール作品の精神は、老練作家も新進作家もなく躍動する大地の匂いに充ちていた。特選 吉田 浪 巧い作家はその巧さに溺れ易いが、浪作品は巧さを沈めて一本の葦のような精神の勁さが加わり、丹念に煮詰められた情念は、上質の布のように仄かな張りりと光沢を備えている。短篇の趣きをみせる三十章に洗練された女人残光の風合を感じた。錆びてなお煙る黒髪 黒椿。あきくさのうしろすがしき立ち仏。秀逸 渡辺 和尾 真底一句を書くことの愉しきを感じている作家のようだ。水の流れる如く目の中の景を掬って、やわらかい言葉に乗せてくる詩味と諧謔、ウイットな句柄は生活感にとどまらず社会観へと拡がっていく筆力に脱帽。欲望というやわらかき水の音

船出スル岸ニイチオクノオボツ。秀逸 荻原久美子 一城を持つ作家としてやはり見過ごせない気品が漂う。独自の言語感覚で不可視の世界を引き寄せて感情を成立させる技量は天分であろう。骨壺といふ香かな水の器かな。悲しみの氷河がボトルネックまで。秀逸 樋口由紀子 さりげない感情を疲労のないことばで描く素手の感触は、岩清水を口にした清涼感がある。鯛や指のすきまは盗まれる。風船の紐長くなる父母の家。板東弘子さんのレクイエムは母。控え目に刷かれる朱があえかにさざ波して余情を誘う。柴崎昭雄さんは、無明の世界を豊かな言葉で柔軟に表白する明るさに拍手。佐藤岳俊さんの一連な磁場を長いこと拝見してきた。ずっしりとある重み、この先何をどう加えていかれるのか、今、しきりにそれを感じる。葉桜の一本になり墓まである。松田悦子

枯若葉ひとは黙って愛すべし。高橋 かつき。家族がこぼれている。たそがれ色の器。たましいを晒すわたしの朱の鳥居。海堀 酔月。釈迦の顔した犬だと気付く……。千 葉 風 樹。曖昧も答えのひとつ冬の雨。佐藤 洋子。石ひとつ飾り甲うものがある。倉 富 洋子。手に馴染む包丁一本あればいい。斎藤 是香。スプーンで掬うひんやりした未来。広瀬 ちえみ。しんしんと雪わがまを押した。佐藤 幸子。さしきしと木になってゆく父の足。高橋 真紀。グラジオラスの朱は折れ馬の貌動く。桐 越 千 絵。瞳の中の波が砕けるわが祭り。辻 スミ。味噌汁の中で低空飛行する。岩間 トキ。突風をやりすこそうか豆を煮る。加藤 かずこ。ぬか味噌の中から日の丸の小旗。菊地 俊太郎。

ある選後感

片柳哲郎

私たちは意味を創造する言葉の働きに賭けてここまで来ている。現代の川柳は表現の「内容」によって決まるのではなく、「表現の仕方、如何に表してゆくか」にあるものだと思っている。私は毎年暮れになると「第九」を聴きに行くが、これは既に内容は判っていることなのだ、ただ指揮者によって如何に演奏されるか（いかに「表現」されるか）が聴取する者の渴望の全てである。本年も現川柳界の唯一の文学賞であるZ賞の選考に当たったが、例によって語尾の「・・がいる」「・・してしまふ」「・・がある」という、賢く恰好良い便利な括りをする作品が多く、これに慣れると思考は貧しく、常套性だけが目立って、想いのたけにすさむことの大切さが見失われてゆくように思われる。一字一字を大切に取扱い、日本の美しい言葉に殉じて逝った誇るべき名作家たちに遠く及ぶべくもないように私考した。

が、日本の美しい言語を、最も正しく有効的に駆使して日本の新しい抒情詩川柳を創出させていた。前述の一語一字に推敲を重ねた意志があり、僅か30句の中で同じ句語を二度使うような厚かましさがなく、文学を心得ている。しかもこの作家の人間の方は幾重にも屈折していて、知的な人間性が流れており、魅力的にかがやきを放つ瞬間を持っていた。

前原勝郎氏は真面目な「我が生の在るところ」を表白して息が詰まった。刻々とうつろう光は、モノの水蓮のように奥にひそむ情熱が秘められていた。尤も自分の言葉に自分で真先に酔ってしまい、同一切れ字が目立つたことは指摘されるべきであろう。

福井陽雪・島 道代の両氏は盲目作家だそうである。福井さんの句は決して巧緻な作品とは思わなかったが、この現代川柳に絶った切実な内意は応募作品中随一と受け取った。川柳は庶民の文芸であると言われるが、その本意はこうした作品の中にあるのだと私は理解している。庶民の代表

者になったような、個の存在がない句に感動物があるうとは思われない。

柴崎昭雄氏の作品は年々その作品の深さが増して来て、鑑賞の意義を高めている。短詩型の文芸は読み物ではなく、文学的に鑑賞するものである。そうした基本姿勢をしっかり持った作品として氏の一篇を推奨する。

吉田 浪さんは初老に近づき、ある自覚から自分の方三尺を改めて凝視した美しい作品であった。自分の年齢に恥じない作品とは私の強く主張するもので、そこに作品というものの大切な生命があるのだと思う。

個々の作品から次の句を賛美する。

ひまわりを見続けていた胸の疵
宮本 めぐみ

目覚めぬ儘に一輪挿しに秋の影
斉藤 はる香

すすきなびくボレロの中を時の舟
矢本 大雪

父が叱っているのは姉の影法師
松永 千秋

猫やなき男のはなし女のはなし
万 迷多

石段の高さを読んで風になる
戎 修

また風が吹いて枕を裏返す
佐藤 幸子

守備範囲

橘高薫風

作者にも選者にも守備範囲がある。得意でない傾向の句を創るのも、馴染まぬ句を選ぶことも不自然さが付きまといがち。「わが守備範囲は完璧なり」の信念を持ちたい。私は各自の守備範囲を深く耕した句を推した。

普 川 洋

引潮の快楽か老いのうす明かり
白葱の白さを老後とも思う
梨むいており影と話しており
老いらくの意も快楽も言うなれば引潮である。満ち潮と違って引潮は、のっぴきならぬ最後のあがきのようで、掠奪的力を発揮する。

坂 東 乃理子

首だけのトンボ私を嘔みにくる
ほお杖や顔は平行四辺形
無言電話は死者からと思うこと
この作者の今回の句の価値は、新奇なユーモアにある。暗に顔を向けたエスプリ

を感じさせる独自の個性は得難い。

山 本 礫

ドラマ缶転がっているソマリアのように
捨てたのは 軽やかな 重やかな
多喜二も修司も天井にいる 眠れない
句作りにはきばった様子がなのは年季のしからしむるところ。一度、枯れた色気の句でまとめられたらと私は常々思っている。

小 林 一 夫

極月の父の秘かなし父かなし
老人不意にでてる坊主を作りたる
祝宴の酒ゆるゆると誰か死す
作者は三十三歳、青春の中で人生の哀を捉える。「あふれる水ありあふれ給へと思う朝」

「蟬幾百ぼくはゆっくり貧血す」哀感の振幅に、また表現にも幅がある。

なかはら れいこ

花抱けば両のかいなの異質なる
恋なれば正しき蝶の掴み方

私も蟹も解体されるもの
虚実皮膜の間のたのしみ方の純粹さが読み手に分かれ、措辞の自信あり気なもの良い。

大 原 なゆた

さくら咲く地球は冥い冥い惑星
滝を見るわたしを凝視する誰か
肉眼で見るのと、感性で見るのと、この作者には物事を見詰める姿勢を強く感じる。

峯 裕見子

タンポポが咲きましたねと誘ってよ
そこ空いてますかと神さまが来る
この作者句の軽さには、独特の味がある。すれ違っただけで感じる魅力のようなものか。

次いで、高橋かづき、秋元深雪、木本朱夏、西秋忠兵衛、竹内すみこ氏らを推した。一人三十句ということから、このような句を創りながら、一方こんな句がという段落の差の激しさも否めなかった。

佳句のあるにかかわらず惜しいと思ったのは、吉田浪さん。擾々、嗽々が理解に届かなかった。伊東マコさん。リズム感のよい作者だと感じたが、リフレイン十数ヶ所もあった。

絵画や音楽も同じだけれど、いい作品は、振り返らせる力がある。もう一度見たくなる。

選 後 感

八 坂 俊 生

大原なゆた作品。自分をよく見つけている。表現も無駄がなく的確である。だから句の中に等身大の作者がいる。「髭を剃るあなたも偽善者の一味」の感覚の鋭さも見逃せない。

島田小吉作品。暮らしの中の発見がある。そこに作者の過剰してきた歳月が感じられて共感を呼ぶ。類想に陥らないためには、本音を句にすることである。

情野千里作品。肉体感覚をとまなつた情念の世界は、おどろおどろと人の心を惹きつける。覗きからくりを見ているようだ。言葉や言葉の幹旋が独自性を持っているのがよい。

坂東乃理子作品。全身でぶつかって、全身で感じたそのままだが、読者を笑いに誘ったり、しんみりさせたりする。これも一つの個性である。

矢島玖美子作品。自分が若くないことを意識している女の恋その他。「三十の恋は静かに押し通す」。心にも表現にも抑制が利い

ているだけに、切なさがある。

倉富洋子作品。感性のよさは生来のものなのだろう。自分の思いのままを書いてるのだが、そんな自分を見つめ直す、違った自分が見えてくる。たとえば「百年カレンダーにしみひとつありわたしの死」のように。

高橋かづき作品。やさしさというものが感じられる。「してあげられることは一緒に雨に濡れること」という句があるからではない。やさしさと哀しさは隣合わせであることに作者は気付いている。

徳永政二作品。見聞きするものがすべて句になる。そして結構いいところを衝いている。しかし、この辺で、ちょっと待てよと立ち止まってみてもよい。句の軽みイコール心の軽さではないのだから。

峯裕見子作品。「動かないので剥製のうすほこり」「この家で死ぬことにしたかぶと虫」のような句をこれからも書いてほしい。以下、選外佳作の内から、心に残った句を一作家一句ずつあげておく。

泥つきのまををもらっていただこう
坂 井 眞由美
野ぶどうは摘まれ汚れて行く少女
松 永 千 秋
和軍笥の把手に長い汽笛あり

樋 口 由紀子
影もひとり私と同じ咳をする

島 道 代
敗北からし連根鼻を抜け

梅 崎 流 青
花を買う 臓器がひとつない身体

広 瀬 ちえみ
身の内の罪皆吐けと来るつわり

鷺 谷 美津子
下駄の緒のゆるさで送り火に屈む

板 東 弘 子
生き残っても果ててもきつと蹲る

万 迷 多
私も蟹も解体されるもの なかはられいこ

少女すらりと体臭 鮎科鮎属
本 多 洋 子
泡ポコン泥鰌の夢が消えた音

戎 修
藤棚はいまいな場所 昼の火事

倉 本 朝 世
深呼吸 火花をひとつ身籠りぬ

秋 元 深 雪

オリジナリティのある作家を

岡 田 俊 介

「雪」「死」「かなしみ」などの重いテーマをもつ作品や、最近新しい波になりつつある、若くて都会的な作品など多岐に亘る作品の中から、表現及びその内部に息づく作家性、とくにオリジナリティを大切に選考させていただいた。上位作家の優秀をつけるのは困難であったが、作家姿勢の一貫性、思いの深さなどから、前原勝郎さんを選んだ。秀逸の三人は作品のレベルが揃っていた。

以下に、各作家の短評を試みたい。

○ 前原勝郎さんの、川柳的に或る一点の悟りを拓いて、そこからほとばしり出たような作品群は、生死の間を、透明に謳い、振れば美しい鈴の音が聞こえるようである。全編を流れる無常感が切なく、明快な文体がそれらを一層助長している。「ふるさと」の句など、とくに顕著である。

萩原久美子さんの作品は、「かはせみ」「二月の父」など、感性のきらめく作品が多く、その都会的で繊細な作品は、内容の重さを

競うものではなく、そのため、人一倍表現の熟練を要する作風であるが、表現の確かさは相変わらずのものがある。

吉田浪さんのさびしさと妖しさを同居させた作品は掴もうとすれば逃げゆくもどかしさ、今一步踏み込めば消える妖しさの、その魅力は独特のものである。

板東弘子さんのひたむきな作品は、主題の重さに加え、作品を完成させる技巧が備わり、どこかに弱々しさをもちながら、イメージの広がりを見せている。

佐藤兵俊さんの凶作の連作は、作風が安定しているせいもあって、読み応えがあり、北の農村の匂いがしてくるようである。思いが先行しがちの主題をよく作品化している。

情野千里さんの作品は、「密会や」「月が出て」などハッとさせる作品が、二、三あった。作り方を心得た作家であり物語性を秘めながら大胆で、とくに下五の使い方は絶妙である。作品にムラがあるのは惜しまれる。

大谷管一郎さんの「庭師」は、樹の匂いのする内容のしっかりした作品で、淡々と描写しながら樹への愛着を滲ませる。リァリティのあるのが強みである。

樋口由紀子さんのあたたかい作品は、楽しく読める。伝達性があって、内容がそれほど濃くないのが、この人の良さである。その他感銘を受けた作品を紹介する。

○ 冬鳥の呼吸 銀色に喪のかたち 矢 本 大雪

六月の人みな孤独傘をさす 高 橋 かづき

水掬う指から逃げてゆくいのち 田 中 薫

幼さが透き通る日の朝ぶどう 岩 崎 眞里子

樹氷並木を往くのは美しい迷い子 斎 藤 はる香

おのきの掌で少年は魔笛吹く 山 宮 風子

芒とびたてあたりいちめんことばにして 渡 辺 和 尾

願いごとのように斜面に植える花 広 瀬 ちえみ

一本の葉をくわえて葉に寝る 菊 地 俊太郎

責任ある作家

酒谷愛郷

「俳句」四月号掲載「森澄雄」氏の作品、おほよそは我がよ過ぎたり枇杷の花
古雪にけふ立春の雪つもる
これらの作品を指して「石原八束」氏が「これはよく自身の問題ですが、例えば立春、立秋、そう言う言葉の遣い方は、ぼくにはもう絶対に出来ない。季語の直訳でしょうが。歳時記にあるから立春とみんな言うんだけれど、立春なんていう……」
きょう立秋ですなんて、実感がある？そこを工夫するのが責任ある俳人の一つの責任であって、安易に立春なんていう言葉は、ぼくには遣えないというわけ。なにも立春なんて言わなくても、古雪の上に雪が積ったと。
まあ、そういう句は他にもありますよ」と俳句作家が安易に歳時記（季題）、既成語を作品の構成上に使用することを、鋭く指摘している。
なぜそのことをここに抽出したかと言うと今回の「Z賞」作品を通読しても、他の柳誌に散見するようにそこには既存語だけの、たとえば「罪」「哀」等の生の作品化

に止まっている。前掲の石原八束氏の指摘にもあるように、我々川柳もまた、作品はことばではなく作品のもつ内意的なものを、もっと深化させて、鮮明に映像化させることに腐心してほしいと思うからである。今回そのことを主意におきながら去年同様に板東弘子さんを特選に推した。まだ作品構成に少しの甘さはあるが、一貫して「自己」を対象して描く詩精神の、どうしても詠まねばならない」という作者の情感の昂揚は、読者を作品に立ち止ませる説得力がある。
秀逸の萩原久美子さんは、確かな語感の洗練された作品は、充分に独創性もあって品位すらある。そのことを思えば、特選の板東弘子さんより巧みかも知れないが、逆にその知的さが作者の実相、作品を弱めていることも否めない。
同じく秀逸の吉田浪さんは常にこちよ韻律を秘めた作品は、作者の内心の調べでもあろうか。
紫崎昭雄さんは確かに修練されていく様は瞠目できるが、佳い作品と思いつながら二度目となると、その作品のもつ興趣

が、「なぜか最初ほどでなくなることが、少し激しい」ようで気になっている。
佳作の樋口由紀子、渡辺和尾、吉田三千子氏の作品の妙味に酔いきれぬ残念さが残る。

風船の紐長くなる父母の家
蔓握ると弓のごとくに夏の日
背の汗に訊ねる高い橋ありきと
忘我たりいっせいに咲く曼珠沙華
泣けば済むものを虚空のからす
爪の泥やがてこの大地に眠りたや
天の川まで前髪を剪りにゆく
ひとり居の半端な歌が終わらない
幼さが透き通る日の朝ぶどう
夢とだえ父の手枕ほしやほし
老人不意にでてる坊主を作りたる
父に叱っているのは姉の影法師
樋口 由紀子
渡辺 和尾
吉田 三千代
前原 勝郎
梅崎 流青
大谷 晋一郎
倉本 朝世
島 道代
岩崎 眞里子
みとせ りつ子
小林 一夫
松永 千秋

選を終えて

工藤寿久

第一回目だかに私も応募した関係でもあらう、いま選をしているという意識など毛頭ない。ひとりの読者として一行完結の詩型文としての川柳を読みきることに熱中しているのである。それぞれ精魂こめた作品群であり然もその数の膨大さには正直うんざりの態でもあった、が川柳を読むということは自分が創作するためのインパクトであり新しいことばからあらたな体験をも予期出来るものだから却って感謝を致したいと思う。すべて素晴らしい作品ばかりであるが推せんのは読者としての私が傾倒した順であるとお許しを戴きたい。
特選に、なかほられいこ氏を推します。
桃花散る行方不明の子が笑めば
沙羅の花とどまることは卑しいか
苦のように悲しむことは秋の雨
暗闇で百合が開くは喪の規律
錆びてゆくかくれ遊びの羅紗ばさみ
三十句中、一字あけの句少し気にはなつたが総じて作者の哀個の表裏にはまったく引きずり込まれてしまった。ことばを無理に昇化させようとする銜いが全くなく全句川

の流れるように読み終わらせた。
秀① 秋 元 深 雪氏
生めぬ子とうたかたを視る花林檎
波音を殺して葱を切っている
箱人形 妊ることの恐ろしさ
果てしない飢え空箱の中に空箱
提出三十句にはすべて女・妻・母の生活の哲理が漲って起用していることばもそれぞれ生活の凝縮であり、その燃焼度に魅かれた。しかも読者を拒否する句がなかった。
秀② 萩 原 久美子氏
眠りてもなほ月浴びて花浴びて
空蟬の真夜に酸っぱき声を出す
一騎見ゆ冬桜の下を通るたび
ことばの組み合わせこそは無限であるがともすれば難解の危険をはらむものだが通常の読みを拒否する事もなくまとめた力量を購う。
秀③ 本 田 洋 子氏
女人埴輪の耳のうしろの静かな海
安眠出来るのは出口のない穴
桜前線北上 誰かを消しながら
ことばの現象はおもしろい。読者に苦笑を

指示してくる。これこそ川柳の骨法技だらう。
佳作
無理に格差を付ける気はないが一応の順序としてお許しを戴きたい。次に敬意を払いながら魅力に満ちた作品を記します。
暗がりて鳴る魔盤のレコードよ
胎内の森に帰ってゆく父等
引潮の快楽か老いのうす明かり
凶作の藁をたたけば父母の骨
照れ笑う男と泣きながら歩く
影もひとり私と同じ咳をする
糸毬の芯から老母をつれ戻す
鏡の中の顔は豆科の植物か
朝粥よ森羅万象ふきこぼし
また風が吹いて枕を裏返す
泣き顔で合唱隊にまぎれこむ
梅崎 流青
倉本 朝世
普川 洋
佐藤 岳俊
谷 沢 けい子
島 道代
長井 すみ子
樋口 紀子
伊藤 紀子
佐藤 幸子
広瀬 ちえみ

三十本の花たち

高田 寄生木

一人三十句を幾度も読み返しているうちに三十句が三十本の花となって迫ってくる

一本一本を等間隔にきっちり植えているもの、さまざまな花が無造作に混在しているもの、小さい花ながらも活気に満ち満ちているもの、大輪の向日葵などなど。百余の花の群れを行きつ戻りつしながらランクをつけることの罪意識に苛まされる。

●特選 佐藤 岳俊
凶作の墓をたたけば父母の骨
稲株も焼いて胸まで灰に座す
経済効率の悪い農業から離れる人が多い
中で稲作に執着する男の後姿が彫像となる。

●秀逸 渡辺 和尾
船出する 岸にイチオクノオブツ
とつぜんにひとにあいたくなるあつさ
川柳の愉しさを知っている男が愛知にいます。

●秀逸 横村 華乱
そろりそろりと棺桶を出す牡丹雪

「雪の極からの風」

萩原 久美子

雪の極からの風音がきこえる。
わが精神の寄せては返す波打際は、打ち返す波がたえず小さく碎けるだけで、永遠に苔むすこともない。

故に、肉の暗部の、肋骨のなかの、頭蓋のなかの、暗い空虚と向き合う以外、術はないのだ。

或る黄昏どき、都芯からバスに乗った。フロントガラスいっぱいに拡がる夕景を見ながら、日本の木は優しい形をしていると、つくづくそう思った。この五月、砂漠への旅をした。ベトウインのテントで一緒に踊ったり、未知のことばかりだったが、エデンの園のあった処を指差された時には、云いようのないものがこみ上げてきた。庭にも園にも、そして楽園やガーデンにも「園い」という意味が含まれる。

庭のように塀や柵こそないが、短詩形も五七五という、或る意味での園繞のように思ふ。
気の遠くなるような昔から、先達は、宮苑や庭園を築き、和歌を詠んだ。それは、とりもなおさず「園繞」こそ人間の理想とする環境だということを感じていたからではなからうか。

酔うて酔うて骨壺ひとつあればいい
ラフなスタイルの川柳に乾杯したくなる。

●秀逸 秋元 深雪
冷凍のみかんを夫婦して齧る
次の世へ曳きずりそうな芋の皮
感性の衣にびったりの帯びが欲しい。

●佳作よりの一人一句

犬とでも時にいのちの話する
月下にて母は土偶を生み落す
影もひとり私と同じ咳をする
問えば静かに群青の息零せり
深みに嵌ったらしい私の尻尾
夕暮れの砕かれやすい父の鼻
共鳴をしてから骨が脆くなる
告白をすると背骨がやや歪む
暗渠かな肉の一片口にする
闇一枚夕風一枚混じりあふ
惜命の縄一本が空にある
花野昏し銃で贖うものひとつ

なゆた 昭雄 道代 洋子 仁子 めぐみ 洋子 せいこ 久美子 迷多 流青

「ひとすじの光の中で」

吉田 浪

私にとって夢の遥かなる賞へのきざしを登りつめて、今、ふわふわと雲のように、漂っております。

たましいの揺れ動きを川柳と言うかたちに置きかえて、私のおもいに最も近い言葉を揃いとのおしみ、紡ぎ続けて 今 ひとすじ届いた光の中で来し方をふり向くとちりばめて来た作品が貝殻のように白く光っています。

憧れのしかも畏れ多い賞を頂き、この先どれ程に作品を掘り下げて行けますか、唯、おもしろいだけがんばろうと震えるばかりですが、おきふしをつき抜けて私は私であることにこだわってゆっくと走りつたと思います。

よき指導者とよき選考委員の方々とおたたく見つけて下さいました先輩に感謝します。

はてしなき賞と思い込んでおりましたのでまことにいっぱいのようございます。ありがとうございます。

・選外のころに残った作品たち
失ったものを探しに来た河口
抽斗はサーカス小屋になるだろう
残された命を思う箸の先
すぐいなくなる街角の占い師
螺旋階段登り切るまで狂えない
春愁のひとり芝居はきりもなし
胡桃割る少年の目に海青し
わたしの中の透明な水たまり
等身大の花野に抱かれてる柩
窓という窓に私がいて一人
登りつめた坂から請求書が届く
花柄の傘はもの欲しげにひらく
一片の鱗と闇を分かち合う
妻が見ていた雲儼も見ていた
大根の花生年月日は問いません
まなうらに幾百翔べり重ね蝶
波の音貧しい村の写真集
この家で死ぬことにしたかぶと虫
真直ぐに走って大人にぶつかった
色褪せた夢の続きを抱いて冬
さがし物見つからぬまま冬になる
深鍋の底で飢えてる金魚たち
あがいてもあがいても冬の曇天

明良 正治 悦香 乃理子 禎子 かつき 宗星 みちこ マコ 美津子 規正 玖美子 酔月 三八朗 雪洲 晋一郎 政二 裕見子 真紀 みどり 晴好 かずこ 文明

「桑野晶子選」

「橘高薫風選」

特選	吉田 浪	岡山 市
秀逸	小林 一夫	豊中市
秀逸	萩原 久美子	東京都
秀逸	樋口 由紀子	姫路市
秀逸	板東 弘子	香川県
秀逸	柴崎 昭雄	青森県
佳作	佐藤 岳俊	岩手県
佳作	情野 千里	姫路市
佳作	梅崎 流青	柳川市
佳作	伊藤 紀子	北海道
佳作	倉本 朝世	大阪市
佳作	本多 洋子	松原市
佳作	なかはら せいこ	名古屋 市
佳作	西秋 忠兵衛	千葉市
佳作	岩崎 眞里子	黒石市
佳作	大谷 晋一郎	高松市
特選	普川 洋	市川市
秀逸	坂東 乃理子	加古川市
秀逸	山本 一夫	京都市
秀逸	小林 一夫	豊中市

特選	「高田」	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	「寺尾」	佳作	佳作	佳作
佐藤	田	奥山	万口	樋原	萩林	小地	立原	渡辺	驚谷	板東	徳永	梅崎	前原	佐藤	倉本	吉田	寺尾	驚谷	広瀬	梅崎
岳俊	寄生木	晴生	迷多	久美子	一太郎	俊太郎	みさと	和尾	美津子	弘子	政二	流青	勝郎	俊世	浪	平	寺尾	美津子	ちえみ	流青
岩手県	選	京都市	宮古市	四日市市	東京市	豊中市	東京市	土佐市	愛知市	秋田市	香川市	守山市	柳川市	津山市	岩手県	大崎市	岡山市	秋田市	仙台市	柳川市

佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	「尾藤」	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸
本情	柿井	坂元	秋堀	海口	樋口	渡辺	尾藤	梅崎	万原	萩原	なかはら	倉富	宮本	樋口	吉田	島田	柴崎	大原	秋元	横村
多野	英一	眞由美	深雪	酔月	由紀子	和尾	柳	流青	迷多	久美子	ななこ	めぐみ	仁子	洋子	浪子	道雄	昭雄	なゆた	深雪	華乱
松原市	姫路市	大東市	滋賀市	弘前市	堺市	姫路市	選	柳川市	宮古市	東京市	名古屋	東京市	仙台市	四日市市	松原市	岡山市	青森市	青森市	茨城県	弘前市

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	「岡田」	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
秋元	立原	なかはら	普川	平多	本口	樋口	大谷	情野	佐藤	板東	吉田	萩原	前原	久美子	勝郎	岡田	藤	佐藤	樋口	峯
深雪	みさと	いこ	宗洋	星子	由紀子	晋一郎	千俊	里俊	弘子	浪子	美子	郎	俊	香	樹	良	多	仁	俊	裕見子
弘前市	土佐市	名古屋	市	東京市	松原市	姫路市	高松市	岩手県	香川市	岡山市	東京市	津山市	選	東京市	小樽市	黒石市	砂川市	宮古市	四日市市	岩手県

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	「工藤」	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
岩崎	矢本	柴崎	島沢	谷藤	佐川	普川	梅崎	倉本	倉本	矢本	秋元	工藤	情野	竹内	福井	戎井	竹内	西本	木本	
眞里子	大昭	昭雄	道代	けい子	俊洋	青世	流朝	洋子	洋子	洋子	洋子	久	千	すみ	文	明	修	忠兵衛	朱夏	
黒石市	弘前市	青森市	青森市	新潟市	岩手県	市	柳川市	大崎市	東京市	東京市	弘前市	選	姫路市	松江市	青森市	青森市	松江市	千葉市	和歌山市	

秀逸	秀逸	秀逸	特選	「片柳」	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	「酒谷」	佳作	佳作	佳作
柴崎	福井	前原	萩原	片柳	松永	小松	みとせ	岩崎	島崎	倉本	大谷	梅崎	前原	吉田	渡辺	樋口	柴崎	吉田	萩原	
昭雄	陽雪	勝郎	久美子	哲郎	千秋	一夫	りつ子	眞里子	道代	朝世	晋一郎	流青	勝郎	三子	和子	由紀子	昭雄	久美子	弘子	
青森市	青森市	津山市	東京市	選	福岡市	豊中	高松市	黒石市	青森市	大崎市	高松市	柳川市	津山市	名古屋	愛知市	姫路市	青森市	岡山市	東京市	

佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	秀逸	秀逸	秀逸	特選	「八坂」	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作
島崎	樋口	松板	峯德	高倉	矢島	坂東	情野	島田	大原	小吉	なゆた	八坂	渡辺	情野	広瀬	桐越	伊崎	岩谷	板東	
道代	由紀子	眞由美	裕見子	政二	かづ子	洋子	乃理子	千吉	乃理子	乃理子	乃理子	生	和尾	千	ちえみ	紀子	眞里子	晋一郎	弘子	
青森市	姫路市	福岡市	滋賀市	大津市	守山市	西宮市	東京市	東京市	加古川市	姫路市	東京市	選	愛知市	姫路市	仙台市	北海市	黒石市	高松市	香川市	

第12回 Z 賞作品集・正誤表

P. 03	上段	4行目	あに ^う いもうと	あにいもと	
P. 05	下段	18行目	姫 ^ろ 路	母親	
P. 13	下段	1行目	坂 ^ま 井眞由美	坂井眞由美	
P. 19	下段	15行目	逆 ^れ 線	逆縁	
P. 21	上段	17行目	揺 ^る 籃	揺籃	
P. 24	中段	21行目	石段 ^の 高さ	石段の高さ	
P. 24	下段	2行目	炎 ^え 之	炎え	
P. 43	上段	2行目	萩 ^{はぎ} 原久美子	萩原久美子	
P. 44	上段	11行目	竹内すみこ	長井すみ子	福岡県

お詫び申し上げます。

尚、事務局が94. 11. 25から発行所の住所に移ります。

事務局より

▼第12回も選者の方々のご奉仕により終了することが出来ました。厚くお礼申し上げます。

▼吉田浪さん、荻原久美子さんが同点、しかも高得点のため、大賞をお二人に致しました。▼結果の発表を兼ねた本誌の遅れをお詫び致します。問い合わせが30件を越えました。▼この賞への期待の大きさを思い、責任を感じております。▼不慣れと多忙を、国立松丘保養園・北柳吟社の天地聖一さんに助けてもらいました。更に態勢を整えます。▼なお全応募者のお名前は公表しておりません。
(杉野草兵)

第十二回川柳Z賞入選作品集

発行日 一九九四年七月一日

編集人 天地聖一

発行人 高田 寄生木

発行所 川柳Z賞選考委員会

〇三〇一―一三 青森県蟹田町一四五

☎〇一七四―二二―三五三七 (FAX共)

頒価 一,〇〇〇円

荷送料 冊数に関係なく 二五〇円

振替 川柳Z賞

口座 〇二三五〇一五―二七一八